表紙, 目次, 抄録, 雑録, 漫録, 雑報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/41657

十全會會誌

第一號

第四高等學校十全會

明治二十九年十一月二十五日發行

◉十全會々誌第壹號目次

◎祝詞

○祝辭　大島誠治
○會誌發刊ヲ祝ス　河合鷲
○十全會々誌ノ祝詞ヲ代フ　久保捨藏
○十全會々誌ノ初刊ヲ祝シテ　番場友平
○十全會々誌ノ發刊ヲ祝シテ　廣野喜久雄

◎原著及實驗　會員

○先天性畸形一束　木村孝藏
○眼球結膜ニ於ケル色素性肉腫ノ一實驗　松本善次郎
○鹿角精ニ就テ　醫學士　高安右人
○化粧石鹼定量試驗成績　製藥士　櫻井小平太
○二回放火未遂犯者ノ鑑定實例　林常雄　松ケ枝眞九郎　森嶋彦夫

◎抄錄

○室内ニ濕氣ノ有無ヲ知ル一便法
○格魯兒仿謨ノ分解ヲ防グ法
○護謨製物品貯藏法
○羯布兒油ノ皮下注射ニ就テ
○沃度仿謨ノ臭氣ヲ除去スル法
○腸チブスニ「フェナセチン」ノ應用
○腸窒扶斯ノ麻醉劑「オイカイン」
○新局部麻醉劑「オイカイン」
○同上トロパコカイン　以上會員K. T生抄錄
○化膿性結膜炎ノ療法　M. T生同

◎雜錄

○十全會沿革略要　本會幹事
○熱氣消毒室　大澤五月
○美甘氏ノ「眼瞼成形小技ヲ讀ム」　岡本京太郎
○赤痢病發生傳播ノ原因（順天堂雜誌轉載）　S. S生
○醫家用製劑集　K. S生

◎漫錄

○老婆心　澤賢吉
○須ラク一年志願兵タレ　天地生
○鐵腸漫錄　松原鐵腸生
○瞬氷閑話　輪壽生
○小言　霜葉生

◎雜報　數件

◎廣告　數件

投書規則

一、用紙ハ中折紙ヲ用ヒ十六行廿四字詰トシ字体ハ楷書タルヘシ

一、誌上匿名ヲ望マルヽモ原稿ニハ必ス住所姓名ヲ詳記セラルヘシ

一、言ノ政治ニ及ビ或ハ德義ニ背クモノハ一切謝絕ス

一、未完ノ原稿ハ採用セス）端書半紙洋紙ニ認メタルモノ又ハ字体亂雜ナルモノハ沒書トス

一、原稿採否ノ權ハ編輯係ニ在リ

一、原稿返戻ノ請求ニ應セス（郵稅先拂又ハ不足ノモノハ受納セス）

以上

十全會々誌　第壹號　（明治二十九年十一月二十五日發行）

祝詞

祝辭

曩者、本校醫學部諸子、設十全會者、課業餘暇、攻窮討論、智識相長、麗澤之益不鮮矣、頃者、諸子胥謀、欲擴張其規摸、以發刊新誌、余嘉其舉、輓近醫學之盛也、日新月精、不可端倪、苟從事焉者、豈可不發揮其術、以應奎運耶、乃廣採所自得之學說、與係于實驗者、錄之新誌、以公于世、則獨得同志切瑳之益耳乎哉、詩曰他人有心、我忖度之、余承乏會長、一言以慶之、

明治二十九年十一月　　大嶋誠治

◎會誌發刊ヲ祝ス

河合生

凡ソ事物ノ社會ニ生レントスルヤ、必ス先ツ、幾多ノ辛苦幾多ノ經營、之カ計畫ニ當ラザル可ラス、一朝事既ニ生ルヽヤ、寔ニ單純無味ナリ、宛モ粗製ノ水晶ヲ採取セルニ等シク、若シ是カ切磋琢磨ノ勞ヲ厭ハヾ、遂ニ固有ノ光輝ヲ發シ、事物ノ價値ヲ高ムルヿナケン、

事ノ既ニ立ツヤ、幾多ノ和合ト幾多ノ熱心、單ニ之ヲ維持スル耳ナラズ、益之カ發達ヲ圖リ、其成長ヲ期シ、有益ナル一新事業、所謂各箇分子ノ精力ヲ養成スヘキ一箇ノ新舞臺ヲ考ヘザル可ラズ、今ヤ我會、幸ニ一箇ノ事業ト

●祝詞

シテ現ハレ、其幼ナルニ係ラズ、各箇ノ熱心ト和合トハ、今日迄幸ニ顚跌ナカラシメタリ、而シテ此間無量ノ潛勢力ハ、各箇分子ノ腦中ニ燃ヘ、抱負トナリ希望トナリ機期漸ク熟シ、一躍シテ其元氣ヲ發表シ、其本領ヲ表示シ、學理ト技術ヲ鍛練スルノ一道途ニ就カントス、力之ニ堪ユルヤ否ヤ、未ダ識ル可ラスト雖、眞箇ニ進取ノ氣象ヲ徵示セルハ、疑フベクモアラサルナリ、

維新ノ日本ハ、一轉シテ國民ノ耳朶ヲ驚カシメタリ、今日ノ日本ハ、二轉シテ外邦ノ耳朶ヲ傾ケシム、洵ニ批評者ハ、四圍環視シ、我一顰一笑、皆視線ヲ引カシムルニ足リ、我優劣、皆彼等カ腦裡ニ刻セシム、噫是ヨリノ日本ハ、陸海軍ニノミ依賴シテ、地位ヲ高メントスルモ、得ベカラサルナリ、地理上ノ版圖、益々廣布スルト同時ニ、學術界、實業界、凡テノ檀上ニ人物ヲ要スルナリ、爪ヲ研キ牙ヲ砥キ、蹶然翼ヲ展ケテ、五大洲ヲ翺翔スルノ勇氣ヲ要スルナリ、此人物ヲ培養シ、是等ノ勇氣ヲ素養スルヤ、亦最モ活學活術ニ索ムル所アルヘシ、夫レ空理空論ニ日維レ汲々シ、一トナク二トナク、歐州ノ糟粕ニ啞從スルハ今日ノ日本ニ迂ナルモノ、素ヨリ創說家、經驗家トシテ採用スヘキモノハ、亦勉メテ採用スベキモ、而モ國家上ノ觀念ヨリ、今後改善進步ノ機會ヲ彼ニ與フルハ、我々失計ノ至レルモノト云フヘシ、吾邦維新以來、諸學ノ泰西ヨリ輸入サルヽヤ、日益々其進步ヲ加ヘ、特ニ醫學ハ、夙ニ先登ヲ取リ、爾來學理ニ於テ術ニ於テ、殆讓ル所ナカラントスルニ至レリ、是レ偏ニ、先輩維持者ノ、必生盡力シタルノ結果ニ外ナラズ、實ニ此第二ノ維持者トシテ現ハル、吾人學生ハ、晏然飽食暖衣、其經驗ヲ讓リ受ケ、其筆記帳ヲ借リ、數年ノ學資ヲ投シ、死學々者ヲ買フヲ以テ事トスルニ至リテハ、改善ト云ヒ、進步ト云ヒ、何日ヲ俟テ行ハル可ケンヤ、況ンヤ我々時世ニ要スル、吾々ノ義務ハ、前途ニ橫ハリツヽアルニ非スヤ、

夫レ學生トナリテ、績ヲ學校ニ置キ乍ラ、會ヲ設ケ雜誌ヲ出シ、團体的事業ヲ作ルモノ、果シテ何ノ爲乎、實ニ校內ノ講義タルヤ、單一ノ學理ニ止マリ、醫師ノ工場ニ過キス、宛モ砥キ學ゲタル快劍ノ如ク、能ク使用スルニ非レバ、亂麻ヲ伐ルコ能ハザルナリ、後日社會ニ出テ、進デハ一筆ノ武器ヲ振テ醫學檀上ニ鬪ヒ、退ヒテハ一匕ノ力ヲ籍テ蒼生ヲ仲吟ノ內ヨリ濟ヒ、國家衞生ニ奔走シテ國民ノ元氣ヲ保護セントスルハ、別問題ニ屬ス、實ニ此種ノ人物ヲ養成シ、此種ノ新知識ヲ取得セントスルニハ、他ニ一ノ道途ヲ擇マザル可ラズ、道途トハ何ソヤ、雜誌ノ發

刊正シク其一ニ居ルナリ、

同志既ニ聚マリ、各箇ノ說ヲシテ相通セシメ、各箇ノ智ヲシテ相換ハラシムルノ機關、既ニ成ル、其機關タルヤ團体ノ精神命脉皆之ニ具ハリ、各自分子ノ美ハ直ニ其美ヲ寫シ、各自分子ノ醜ハ忽ニシテ醜惡ノ現象ヲ印スル、一大寫眞板、一大姿見ヲ具有シ、一朝吾人ノ擧措、吾人ノ言辭、臭穢ナラン乎、此銳敏ナル板ノタメニ、アタラ內部ノ耻辱ヲ暴露シ、徒ラニ嗤笑ヲ招クモノ玆ニ出テントス、噫世ニハ、稍大誌トシテ目ベキモノモ、頑固ノ說ヲ擁シテ攻擊爭論的ノ雜誌トナリ、而ラザレバ實際ニ適セザル奇怪ノ說ヲ翻譯シ人ノ好奇ニ投スルモノ、而ラサレハ玩具的ノ雜說ヲ顚列シ徒ニ人氣ヲ買ハントスルモノ、往々ニシテ有リ、縱令學術界ノ眼光ヲ以テ觀察スレバ、或ハ有益ナラン、吾人學生トシテ、以上論ズル諸種ノ條件ニ適スルモノトシテハ貴重ナリト斷ズ能ハス、一寸ノ蟲尙一寸ノ精神アリ、吾人學生未タ幼雅ナリト雖、尙多小ノ意見アリ又說アリ、熱心ト注意トヲ用ヒ、始メテ此板上ニ採影セルモノ、必スヤ恥ツルヲ要セサル好雜誌トナルヘシ、於此乎彼ノ希望スル所ノ精神タリ命脉タルノ實モ、智ヲ換ヘ識ヲ交ユルノ機モ、亦好ム所ニ出ツ、

以上論スル所、只我會々誌トシテノ効用ト及希望トニアリ、今進テ其分子中ノ先進諸氏ニ望マントスル所アリ、蓋シ本誌發刊ノ利益ハ、延テ師弟間奬勵ニ大關係ヲ及ホスヲ知ラザル可ラス、夫レ人ハ己レ自ラ研究セルモノハ、之ヲ價値アル實驗トシテ許スヘシ、而モ之ヲ以テ筐底ニ埋沒スルヲ快シトセス、公ク世人ニ報道センヿヲ欲スルハ人ノ常情ナリ、今ヤ師タルモノ、一事物ノ經驗上、稍意ニ得タルモノアラハ、其成績ハ精細ニ我弟ニ報道センヿヲ務ムベシ、弟タルモノモ、他ニ幾多ノ學術書籍雜誌ヲ讀マンヨリモ、情トシテ師ノ實話ヲ悅ビ、信用シテ之ヲ享ケ、愉快ニ之ヲ記臆ス、換言スレバ、師ハ死學ヲ授ルニ比シ敎育上一大功力ヲ樹テシモノトスヘク、弟ハ又死學ヲ學フニ比シ一大利益ヲ取得セルモノトスベシ、殊ニ玆ニ望ム、諸氏ハ吾等先輩ニシテ、學術經驗共ニ長セラルヽ所、從テ今迄ノ經歷上、多少ノ良果ヲ歛メラレシ場合モアルベシ、失敗セラレタル場合モアルベシ、師弟ノ間些少ノ謙讓或ハ隱蔽ヲ要セズ、磊落ニ氣安ニ報道アルヘシ、吾々學生、專門ニ入ルノ日尙淺ク、實地ヲ蹈ミ手腕ヲ用ヒタルノ場合少ク、而モ尙空論ヲ悅ビ、偶々學藝誌ヲ繙ケハ、一トシテ失敗ノ聲ヲ聞クヿナク、皆良果ヲ得タルモ

ノト覺悟スルヿ多シ、是レ大ナル不利益ニシテ前車ノ顚ルヲ見、スシテ尙後車ヲ運行スルト一般、改善ノ氣象ヲ誘起スルヿ實ニ薄シトス、故ニ今ヤ吾々ノ熱心スルハ、寧ロ失敗談ヲ聽クヲ望ムニアリ、人誰カ失敗ナカラン、而モ之ヲ蔽フモノハ、益々其過ヲ大ニスルモノナラズヤ、

贊成會員、卒業生諸氏ニ望ム所アリ、諸氏ハ皆吾人先輩、語ヲ換フレバ、第四高校ヨリ產出セル專門家、身体ヲ與タルハ氏等ノ父母、業ヲ與ヘタルハ此校、其關係ヤ實ニ深カシ、若シ人評ノ我校ニ及ブヤ、耳欹テヽ之ヲ聞キ、其惡ヲ稱セバ背ヲ張リテ之ヲ辨シ、其可ヲ稱セバ手ヲ揚ゲテ之ヲ贊スルハ人ノ常情、卽一時校ヲ退キ、地ヲ離ルヽト雖、校ノ可タリ否タリ、其幾分ノ責任ハ素ヨリ免レザル所ナリ、之ヲ以テ、若シ後進ヲシテ充分ノ價値アラシメ校ヲシテ高尙ニ進マシムルハ、則チ自已ノ位地ヲ高ムル所以、後進ニシテ社會ニ無價視サレ、校ヲシテ低カラシムレハ、則チ自已ノ位地ヲシテ、墮落セシムル所以ナリ、故ニ校ノ批評ヲ聽テ是ヲ報道シ、自己ノ意見ヲ吐露シ以テ其弊ヲ矯正シ、經驗シ得タル事跡學說、之カ報道ヲ與ヘテ、後進ノ修業ヲ助クルハ、實ニ其校ニ思フノ切ナル耳ナラス、延テ社會ノ爲メニ盡セルト言ハザルヲ得ズ、徒ラニ飽食暖衣ニ維レ汲々シ、一片ノ赤心ヲ投スルニ吝ナルハ、洵ニ策ノ得タルモノニ非ザルナリ、今ヤ我十全會ハ、一箇ノ機關ヲ創造シ、諸種ノ報道ヲ俟チツヽアルナリ、事大小トナク、信ズル所ノモノハ之ヲ報セヨ、來テ先進ノ義務ヲ盡セヨ、

予ハ終ニ茲テ一言ス、以上諸種ノ注文、未來ノ希望ニアルナリ、我會ノ盛大ハ、急頓ヲ望マズ、着々進步ニ向フベキ潛勢力ヲ要スルニアリ、故ニ會員ノ和親ハ、立派ナル規律ニヨリテ來ラス、茶ヲ啜テ雜談シ杖ヲ牽テ山ニ遊ブヨリ來タル、會誌ハ初ヨリ過大ナルベカラズ、寧ロ小ナルヘシ、過大ナレハ退行變化ニ趣クヿ易ク、過小ナレハ尙進ムベキ餘裕アリ、過小トハ何ソヤ、吾々學生ニ適當スル雜誌ヲ發刊スルニアリ、

◎十全會雜誌發刊ノ祝詞ニ代フ

輪　濤　生

泰西醫學ノ東漸シテ以來我邦醫家日ニ月ニ駸々乎トシテ進ミ其濟世ノ仁ヲ與ヘタルノ功鮮トセズ顧フニ一國ノ盛衰ハ國民身体ノ强弱ニ基キ國民身体ノ强弱ハ一ニ醫學ノ發達如何ニ依ル是レ文明諸國ガ競フテ力ヲ此ニ竭ス

所以ナリ

今ヤ十全會ハ此進運ニ隨ヒ開發ニ伴フテ勃興ス抑モ本會ハ我第四高等醫學部醫科藥學科職員學生ノ組織ニカヽリ漸ク昨年正月ヲ以テ創設セラル爾來日尚ホ淺ク未ダ造詣スル處ナシト雖トモ侃々諤々毅然トシテ之レ進ミ勅語ノ聖旨ヲ奉戴シテ交誼ヲ厚フシ傍ラ醫學ヲ練磨シ超然卓立風潮ニ浸セズ流弊ニ染マズ優然醫界ニ一旗幟ヲ樹テントス而シテ茲ニ職員有志ノ協賛盡力ニヨリ大々的改革ト共ニ全十會雜誌ヲ發刊スルノ盛運ニ會セリ吾人豈ニ祝セズシテ可ナラム哉然リト雖ドモ余輩ハ是レヲ祝スルト共ニ又大ニ會友諸君ニ向フテ期望スルトコロナクンバアラズ

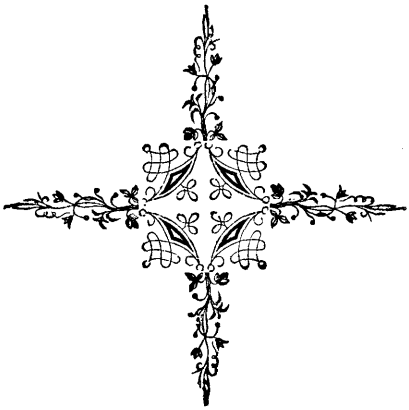
近時我邦定時刊行ノ醫事雜誌其類甚ダ多シ然レ共朝ニ起リテ夕ニハ廢刊ヲ告グルガ如キモノ多キニ至テハ害アルモ益ナク寧ロ開設セザルノ勝レルニ如カズ現時果シテ此流ナキカ紛々擾々雲散霧消モ啻ナラザルニ非ズヤ之レ蓋シ一時ノ風潮ニ浸染セシ弊害ナリト云フト雖ドモ抑モ亦會員ノ非團結非奮勉ニ職由スルノ多カラズンハアラズ要スルニ會ノ盛衰消長ハ唯夫レ會員諸士ガ大團結大奮勉二事ノ覺悟如何ニ依ルノミ今ヤ暑威已ニ去リテ涼秋日ニ加ハリ四郊幽清誠ニ勉學ノ好期トナレリ此時ニ當リ十全會雜誌ノ發刊ヲ見ル我輩ハ案ヲ拍チ快乎トシテ止マサルナリ乞フ會員諸君將來同心協力益々本會ノ盛大ヲ圖リ本會ノ繼續シテ無窮ナラムコトヲ敢テ禿筆ヲ顧ミス蕪辭ヲ陳シテ祝詞ニ代フ

◎十全會々誌ノ初刊ヲ祝シテ　　番場友平

々ーのかみ道のさかゑを守らせい
文のはやしも萬代やゑん

◎十全會々誌ノ發刊ヲ祝シテ　　廣野喜久雄

白菊の闇れしやりてかほりけり
菊咲て千卿は秋のものおらす



上記ノ「フアッル」ハロイベ氏著書歇私的里條下ノ一節ニ全ク符合スルヲ以テ左ニ之レヲ抄出ス

……Die Laehmungen sind als hysterische im Gegensatz zu den von palpabeln Veranderungen in Gehirn und Ruckenmark abhaengigen Laehmungen in den Fallen leicht zu erkennen, wo ihr Charakter sich als „Willenslaehmung" „Funktionslaehmung" dadurch ausspricht, "dass nur gewisse Bewegungen, Z.B. Gehen und Stehen I), unmoglich sind, waehrend andere Leistungen von denselben Muskeln anstandslos vollzogen werden. ……

1) Diese Form der hysterischen Laehmung ist neurdings mit dem Namen „Astasie" und „Abasie" belegt worden. Die damit behafteten Kranken sind schlechterdings nicht im Stande zu gehen oder zu stehen: sie Knicken bei jedem Versuche, sich aufrecht zu halten, widerstandslos zusammen. Im Liegen kann weder eine Abnahme der motorischen Kraft, noch eine Stoerung des Muskelgefuehls oder der Coordination, noch eine Reflex —und Sensibilitaetsstoerung constatirt werden. Wie andere hystherische Willenslaehmungen kann auch die Astasie und Abasie plotzlich entstehen und verschwinden. Zuweilen scheint sie das einzige hysterische Symptom zu sein, d. h. andere hysterischen Erscheinungen koennen daneben fehlen.

予ハ尙二三ノ梢興味アル歇私的里ノ實驗ヲナセリ他日本誌ノ餘白ヲ借テ報導スルヿアラン

抄　録

◎室內ヨ溫氣の有無を知る一便法

本問題は刀圭家の屢々遭遇する所にして之れが確答は容易に爲し難し爰ゐ簡易ゐる一試驗法あり卽ち可檢室內に新鮮なる水酸化石灰一千瓦精密に秤定すべしを置き牖戸を密閉し廿四時經て更に之れを秤るべー重量の增加十瓦以上卽ち一%なるときは該室は溫氣と帶ひ衛生に害ありと做すべし

○「クロヽホルム」の分解を防ぐ法

少量の沈降硫黃をヲ加へたる(重量千に付き一の比例)「クロヽホルム」は永久分解するとなし

○護謨製物品貯藏法

全品い之れを3%石炭酸%水中ヨ貯藏するを最も良しと

す數十年の久しきに渉るも毫も變性せずして充分用に耐ふ(Aerztl.Centlaranzeiger.1895 No 34)

○羯布兒油の皮下注射に就いて

ドクトルシルリング Dr Fr, Schilling, Nuernberg. は諸般の危險なる傳染病殊に急性肺炎其他多くの中毒症等に來る虛脱に羯布兒阿列布油の皮下注射を施して良効果と得たる實驗を報して曰く普通用ひらるゝ量は少量に過きて屢々寸効無し予は毎に大量を用ひて好成績を收め而かも全く無害なるを實驗せりと仝氏は數年來只小兒に十倍の「カンフルオレーフ」油の一筒、壯年者には稀れに三筒多くは五乃至十筒を一時に注射し虛脱甚しきときは一時に羯布兒一、〇と皮下に注射するに(五、〇入注射器を用ゆるときは二裝藥、若し普通のプラワーッ氏注射器を用ゆるときは鍼を皮下に刺入一置き左右前膊に各五回)殆んと觸る能はざる微弱の脈搏も〇、五の羯布兒注射に由て稍々力を得一、〇に由て全く恢復すと云へり氏は最近重症の潰亂性心内膜炎の爲め虛脱し恢復の望殆んと絶へたる患者に一日二回一、〇宛ノ羯布兒を皮下注射し豫想外の好成績を得たりと云ふ要するに氏は上記の如き大量の「カンフル」ヲと用ゆるも効ありて危害は更に無しとし且つ各教科書に大量の「カンフル」を應用するときは爲に腦症狀を發すと記載しあるも氏は此の如き腦症は曾て見ざりしと云ふ一例證と擧けて曰く予は曾て肋膜肺炎に罹れる十六年の學生にして該症經過中人事不省に陷り項强、上肢の緊張性筋收縮等を發せし者を治療し上記の如き腦症狀を呈せしに拘らず心臟脱力の發作に向て毎日一、〇の「カンフル」を皮下注射せしも腦症狀は增劇せざりしのみならず心臟は終に力を恢復し腦症も亦數日にして消散せり云々(Muenchener medic. Wochenschrifts 1895 No. 38.)

○沃度防謨の臭氣を除去する法

沃度防謨の臭氣は人の厭惡する所なり而して之れを除去する簡法あり卽ち少量の「ベルガモット」油を沃度防謨に加へ研和するときは沃防は全く無臭性となり數日を經て油分揮發し終ると共に再ひ殊異の臭氣を放つ壜子中に貯へ密栓するときは無臭性を保つと久し沃防凡五、〇に油二三滴を加ふべし

○腸窒扶斯に「フエナセチン」の應用

ドクトル、ゲ、ビガミー氏は腸窒扶斯患者二百名に「フエナセチン」を應用し好成績を收めたる治驗を報告せり右二百名の内死亡の轉歸と取りしは僅々六名の少數にして死因は營養不良と不攝生なり又百廿三名は肺及

腦膜症狀を呈せしものなりしと云ふヒガミー氏は診斷を確定するや「フェナセチン」三、〇を六包に別ち每四時一包を服せしむると一週間（小兒老人ゐは一日量を二、〇乃至一、五ゐ減せり）にして一週間の後壯年者には每六時〇、五小兒老人ゐは〇、二五と投し體溫三八度以下に降るを俟て撤去せり本療法の効驗著明にして疾病は每ねに善良の經過を取り嘔吐、腎炎、血尿、虛脫、等は曾て見ずして發汗は每に著しゝりしと云ふ（發汗殊ゐ甚しきときは減量して可なり）原著者思へらく本劑の奏効は一は之れを其發汗作用に歸すべしと雖も一は血中に入て窒扶斯病毒を中和するに因すべしと又氏は本劑の窒扶斯症に對する効驗ゐ「ラクトフェニン」に優れるとと實驗に對照して確定せり（Therap.monathefte,1896 No 13）

○腸窒扶斯

腸窒扶斯と腦膜炎との鑑別は屢々太だ困難なり、近時ドクトルシンゲル氏か爲せし左の實驗も亦た其一例とすべし、患婦は本年一月廿一日ドクトルパアル氏分擔の病室に入れり、入室の八日前より身體異和疲勞を覺へ、全く四日前劇頭痛、羞明あり、一月廿日惡寒戰慄及高度の熱を發せり、既往症中記すべきは患婦六歲のとき麻疹に次で左側化膿性中耳炎を患へ當時に至る迄未た全く治せず、一八八九年に乳頭突起の穿孔術と受け爾來既に八回全手術を受けたりと云ふ、本年一月罹病の當初より重き一般症狀と呈し、體溫ゐ驟留性ゐ高く（三九、三乃至三九、六）、脈頻數、頭痛劇甚、入室の初め三日間嘔吐頻回、胸臟器ゐ異常なく、脾臟著大、腹部陷沒、皮膚知覺過敏を呈し、乳頭突起部ゐ浮腫疼痛無く、項強亦た無し、以上の症狀殊ゐ既往の疾病ゐ徵すると兒は腦膜ゐ於ける病機若くは腦膜炎を伴ふ腦膿瘍と考へざるを得ざるべし、而して入室後三日頭痛殊に强劇ゐして手術の必要を問ふの危機ゐ迫るゐ當つて恰も左の事實を追想せり、卽ち患婦はパアル氏分擔區の一病室の小使に雇はれ居り該病室に在りしは腸窒扶斯恢復期の一患者なりし、患婦は曾て看護の勞を取りしとなく且つ糞便の處置を爲さゞりしも只日々該患者の尿器と洗滌するを務となせり、又シンゲル氏ゐ一日患婦が隻手に充ちたる尿器と携へ隻手ゐ麵麭を持ち之を喰ひ居るを目擊したること是なり、乃ち一月廿一日患婦の刺絡血液及尿と細菌學的に檢査せしゐ成績ゐ陰性なりし、全廿四日再ひ尿を檢せしに這度は多くの腸窒扶斯黴菌を發生せしのみならず次日「ロゼオラ」も發現し且つ爾後

の經過い腸窒扶斯の診斷を確定せしめたり、依之觀之れば腸窒扶斯患者の尿も亦た傳染を紹介し得べく且つ遠く恢復期に至るも尿中尚ほ窒扶斯黴菌を含有すると以て尿も亦た糞便と等々傳染の危險ある排泄物として宜しく之れが處置を行はざる可からず！腸窒扶斯の病院傳播の多々は從來該患者の尿を不問わ措ひしに坐すものと謂ふ可ひなり（Wiener medic Presse 1896.No 20）

○新局部麻醉劑「オイカイン」　Eucain.

Gaetano Vinci (Messina) 氏いリーブライヒ氏の試驗所に於ける檢査に基ひて新藥「オイカイン」の効用及其非毒性なると承認せり本劑の「コカイン」に異なる所は一水素あとーむに一めちーる化合物の代れるにあり而ーて此のめちーる化合物は「アセトン」に「アンモニヤック」を作用せしむるわ由て生成するものあり、遊離鹽基は「コカイン」の如く水に溶解すると太だ難くして光輝ある粗大の結晶を成形し又酸類と抱合して中性鹽類となる、此の鹽類い鹽基と全一の効用と有す」「鹽酸オイカイン」は水溶液よりして光輝ある小板狀若くは板狀の結晶「メチールアルコホル」よりは光輝ある三稜柱形結晶となりて析出す、兩者共わ大學「クリニク」に於て眼病就中急性及慢性角炎膜、結膜炎淚囊炎、諸般の手術、異物除去、燒灼等に試みられしに二%溶液は麻痺の發起、繼續及程度の諸點に於て「コカイン」に讓るとなく、知覺麻痺は完全にして先つ角膜わ起り亞で結膜に來り點眼後二乃至五分時にして既に之れと証明すべく、平均十分乃至十五分時持續せり（麻痺の時間更に長からんと欲せば反覆點眼せば可なり）、知覺麻痺と全時に結膜に輕度の充血及刺戟を呈す又二三の患者は僅々數秒時間輕度の熱灼感覺を訴ひしも是れ只「メチールアルコホル」製劑に於けるのみ、故に或は水性製劑を優れりとすべひ乎」瞳孔開大及調節機麻痺い欠亡す故わ「オイカイン」ハ知覺麻痺と全時に貧血と望まざる場合に於て「コカイン」わ優れりとすべく知覺麻痺し且つ貧血を要する眼炎症ょ對してい「コカイン」は依然舊價と墜すとなし其他「オイカイン」の「コカイン」ニ優れる點は、永久貯ふるも分解するとなく、滅菌亡法の爲めに變化と蒙むるとなく、且つ其毒性「コカトン」に比し遙かに弱ひと是あり

齒科醫キーセル氏は初め本劑の十五倍溶液と使用し手術と施術部の大小に應じ敷ヶ所に一乃至一、五五若ゑくい二箇を注射せしも後ちには 1:6½ 溶液を用ゐて嘉すべひ成績と收めたり、心臟は本劑の爲め毫も影響を

蒙るとなく知覺痲痹は「コカイン」に比し其及ぼす部位廣く持續長きと云、且何等の危害なくして二、〇量迄注射すると得べし（1:6½ 卽ち15%溶液十二筒）とす、然れども此の如き大量は實際要すると極めて稀にして大抵其半量を以て全口を無疼痛になすべしと云へり、氏は1895年十一月此新藥を得て己來大に其効用に滿足し他の痲醉劑は悉く之れと排却せんとするに至れり云々（Zahnarzt.Rundschau 1.96/96

S.R.Reichert 氏は頸部及鼻疾患に「オイカイン」を用ゐ本劑の局部痲醉の作用强大にして適當の量を起へざるときは全く無害にして心臟に何等の影響を及ぼさゞると確認せり

C.L.Schleich氏も亦た之れを一乃至五%溶液とゐして諸種の粘膜に使用し其全く「コカイン」に代用すべきして更に無害ゐるを實驗せり

「オイカン」は「コカイン」より代價低廉ゐり（Deutsche Medicinal-Ztg.1896 No-34）

○仝上トロパコカイン Tropacocain

Dr Zoltan Vamossy は本劑を「コカイン」の代用藥として賞揚す Chadbourne 氏ゐ從へゞ本劑は

第一　其毒性「コカイン」のもの丶半に及ばず

第二　其運動中樞に及ぼす毒作用は「コカイン」より緩ゐり

第三　知覺痲痹の發起一層速かにして其持續も亦た更に長し

第四　充血を悉く起すも輕度ゐして且つ避くべし

第五　必ずしも瞳孔開大を來たさず若し之を來たすも「コカイン」に於けるより弱し

第六　防腐作用を有すゐを以て其溶液は二三月間効用を失ふとゐし

本劑はシュワイゲル氏「クリニック」に試用せられしに奏効は「コカイン」より速く、知覺痲痹の持續も長く瞳孔開大は稀れに、貧血を來たさずして一二分時間の充血を來たし、食鹽水を用ゐて溶液となすときは眼に刺衝の感を與へず、不快ゐる副作用は未曾有なり、奏効「コカイン」より迅速ゐるを以て異物除去に最も適し、3%溶液一二滴點眼後未だ二分時に達せずして無疼痛に虹彩膜切除術を施ゑ得たりと云ふFilet氏は3%溶液使用後半分時にして截腱術を行ひたりと云へり、左の處方を最良とす

Rp. Tropacocain. mar.(Merk) 0,3
Natri chlorat 0,06
Solve in

Aq. destill 10.0
Filtra!
(Therap. monathefte 1896 No=9)
以上九項　K I 生抄錄

○化膿性結膜炎の療法

カール、ホール氏ハ化膿性結膜炎に對し過滿俺酸加里飽和溶液十乃至十五滴と水呑コップ一杯の水に點滴し之に脫脂綿を浸し初めは毎五分時に先つ上瞼と飜轉し右記の綿を搾り結膜面は灌漑し次て下瞼と飜轉し親しく膿汁と洗除し分泌物多少減少すれは毎十五分時、後ふは毎一時間に洗滌すれは充分ゐり或は看護婦をして下瞼のみ飜轉し上記の如く屢々洗滌せーめ二時間乃至三時間毎ゐ醫士自ら移行部を洗滌するも可なり如斯にーて前二十五名の重症淋毒性膿漏患者に就き實驗ー內一名(四%)角膜潰瘍を起せーも能々治癒ー爾後の經驗に由れは角膜合併症は二%に過すと

氏又結論ーて曰々化膿眼の處置に就ては更ゐ新案と見出さす又良案なー良犯者ハ新案に非す新案と認むる者は不良ゐーて試驗するの價値なーと (Centralblatt fur Augenheilk. 1896. P. 233.)

m I 生抄譯

雜　錄

○十全會沿革略要

十全會幹事

吾輩は玆に十全會の沿革と述べて會員諸氏の瀏覽に供せんとす、敢て贅事に非さると信するなり。抑も本會は明治廿七年十月、始めて其端緒と開きたる者にゑて、爾來歲と重ぬること已ゐ三星霜、會と開ゑこと大小十數回、當時尙二葉の稚樹、今日漸々雲漢と突かんとするの勢ゐると見て、轉た今昔の感に堪ゑさるものあり。創立委員とゑて、本會の創設ゐ盡力ゑたるは、實に左の諸氏なりとす

澤田米次郎　星野正齋(以上醫科四年)
鈴木寛之助　室田万三太郎(以上醫科三年)
白井精一　河合鷲
藤田勝治(以上醫科二年)
北川健三　田中健治(以上醫科一年)
平井正澄　佐々木猛彦
石田太吉(以上藥學科)

諸氏は熱心と誠實を以て本會の創設ゐ從事ゑ、昨廿八年二月、野田寺町妙慶寺ゐ於て、遂に本會の發會式を擧ぐるに至れり。吾輩は今に於て、創設委員の熱衷と深謝す。明治廿七年以往、學生中醫學部全体の會合と創立せ

んと企てたる者なきを非ず。さかも企謀は常を中途をえて、厭ふべき事故よりて破壞せられたり。獨り諸氏は、勇往直進、能く創立の効を奏えたり。これ諸氏が從來の發起者よりは、よく多々の精勵と勤勉とを有えたるよ基かさるべからず。又以前は諸事圓滿を欠くものありえも、本會は創設以降、醫學部よ於ける諸般は事件がよりよく圓滿融和よ進行するよ至りたるは、偏よ諸氏乃賜物なれはあり。發會式乃景況い世乃白兩者流と異なり、素朴を以て開かれ、素朴を以て閉ざられたり。思ふを這般は情況い、尙會員諸氏は眼前に、躍如とえて現出するも乃あらむ。故を今之を省く、玆をい會當初乃、役員を示さむか。

會長　大島　誠治　　副會長　高安　右人

評議員　木村　孝藏　鈴木文太郎　木村竹治郎
櫻井小平太　堤　從清　澤田米次郎
星野　正齋　鈴木寛之助　室田万三太郎
白井精一　河合　鷺　林　義輔
寺本虎松　佐々木猛彦　石田太吉
平井正澄
幹事　小野郁藏　舘　一郎　島田吉三郎
千田榮三男　金森種次　鹽谷義一
北川健三　田中一次郎　澁谷十郎
林　常雄　山崎清一郎

（但えを幹事而已い互撰に非ず輪番ありえもは）

仝五月、野田寺町妙慶寺にて、第一回通常會を開く。仝九月、役員は改撰あり、左は如え

會長　大島　誠治　　副會長　高安　右人

評議員　木村　孝藏　木村竹治郎　鈴木文太郎
櫻井小平太　堤　從清　鈴木寛之助
室田万三太郎　白井精一　河合　鷺
皆川　久　吉田　幡誠　山下博吉
八十島庄五郎　地倶次作

幹事　東　良平　廣野喜久次　藤岡勝治
鹽谷義一　北川健三　田中健治
林　義輔　寺本虎松　林　常雄
金谷彦次　石川安太郎

（輪番幹事を改めて、互撰とありえもの乃）

仝月十一日、新入會員四十一名と迎ふ。仝じ下旬大乘寺山頭、松籟綠濃かなる邊に於て、本會大運動會を開く。角力、競走、綱引等、啞々絶倒すべは者、嘻々笑ふべは者、枚擧すべからず。終いつて會員相鬩欒、盃を擧げて滿引す。酒三行、山靈と驚かえ、木精を走らえむ。本年一月

廿二日東別院に於て、新年大會を開く。三月十三日本校生理室に於て、第二回通常會と開く。五月、廿三日、野田寺町高岸寺に於て、第三回通常會を開催す。來會者百五十名。特別會員鈴木文太郎（レントゲン氏X光線ゐ就て）仝野田忠廣（梅菌とエネルギーの關係）副會長高安右人（獨逸語れ必要）れ三氏い各々括弧内れ演題ゐ就て、縷々述ふる所あり。說い卽ち幽玄、辨い卽ち明快、聽者をして坐ろゐ案を打たしむ。六月三日、生理室ゑて臨時會と開ケ、會員白井精一外十一氏れ提出に係る、本會々則修正案と討議す。該案中重ゐる修正い、左れ如し

現行會則

一、雜誌は隨時發刊す

一、評議員十六名（特別員會より五名通常會員より十一名を互撰す）幹事十一名（通常會員より互撰す）を置く

一、通常會員れ會費い一ヶ月四錢なり

修正案

一、雜誌い一學期每に發刑す

一、評議員六名（特別會員より互撰す）

幹事九名（贊成會員より二名通常會員より七名と互撰す）及委員若干名を置く

一、通常會員ハ會費として一ヶ月金四錢を要す

大嶋會長議長席につケ、石森國臣氏修正案說明乃任に當り、遂條審議れ末、終に修正案い成立したり。依て新たに役員と改撰す、其結果、

會長　大嶋誠治　副會長　高安右人

評議員　野田忠廣　櫻井小平太　木村孝藏　小川勝陳　岡部忠　山碕幹

幹事　東良平　白井精一　石森國臣　西野監次郎（以上通常會員）　堀大次郎　岡本京太郎（以上贊成會員）

の諸氏當撰す。九月下旬、會則第四條により、役員の改撰を行ふ。其結果左れ如し

會長　大嶋誠治　副會長　高安右人

評議員　木村孝藏　野田忠廣　櫻井小平太　小川勝陳　山碕幹　岡部忠

幹事　藤岡勝治　石森國臣　西野監次郎　山口平五郎　八十嶋庄五郎　鈴本久米助（以上通常會員）　堀大次郎　岡本京太郎（以上贊成會員）

又左記の諸氏は、委員に命せらる。

村上庄太　堤從清　松本善次郎

白井精一　河合鷺　北川健三

十月十八日、本校扣所に於て、第四回通常會を開く。以上は、本會の沿革略要なりとす。

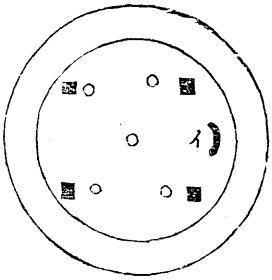
吾輩は此篇を草するに當つて、創立委員がよく創立乃効を奏したると謝すると共に、現今の會員諸氏が亦よく守成の任を盡くすを感ず。夫れ一人の心い千万人乃心なり。一人忠實あれば、一會卽ち忠實を以て興らん。一人怠慢なれば、一會卽ち怠慢を以て亡びむ。見よ々々世上の團体い朝に起て夕に倒るゝに非ずや。幾多の雜誌い、喝采を以て迎ひられ、嘲罵を以て送らるゝに非ずや。諸氏若し前者の覆徹ゐ鑑み、本會に忠實なるは、卽ち邦家に忠實ある所以の理を察し、永く熱誠を以て本會と終始せば、吾輩不肖なりと雖も、乞ふ諸氏の驥尾に附して、千里の遠きよ達せむ哉

○蒸氣消毒室　　大澤五月

予醫學部十全會報第一號の發兌を祝し役員諸彥の御盡力の深きを感謝し併而茲ゐ予が昨年十二月一日一年志願兵として步兵第七聯隊へ入營以來の實見事業の一二を報道し以て爾來卒業生諸君の爲めに多少の臭益を企てんと欲すれとも或は軍機の秘密を漏らす恐あれは此れを報ずる能はず故に今金澤衛戍病院搆內の熱氣消毒室の搆造に就き大略を報せん此れ牛角の一蚊蠅たるを免かれずと雖とも傳染病流行の時に於ては或は暗夜の孤燈たらんか

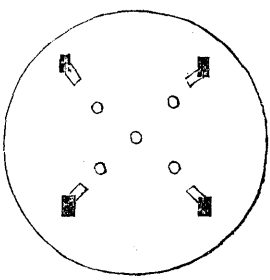
熱氣消毒室は東西に面じたる土床木造の平屋にして瓦葺なり間口は四、五〇迷奥行六、七〇迷土床面積二六、

銅蓋裏面

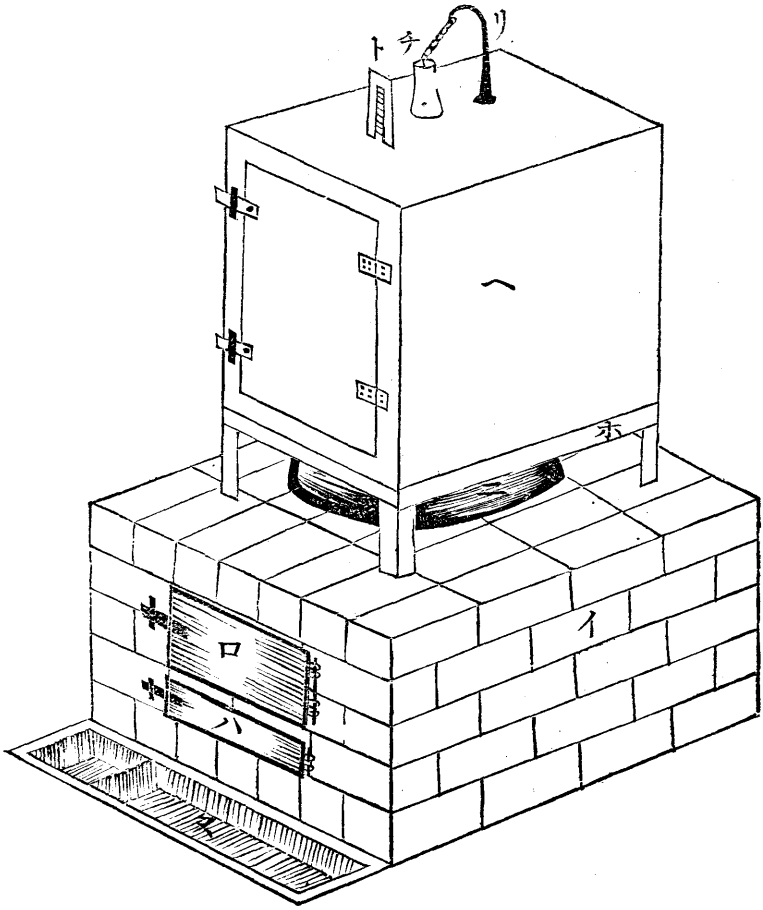


イ釣ニシテ之レニ銅ヲ掛ゲ裝置ノ外ヨリ引ケハ蒸發孔ノ口〇ヲ大小適宜ニシ得

銅蓋上面



消毒裝置ノ圖



イ　竈
ロ　燃口
ハ　通氣口
コ　圓桶
ホ　消毒房室受臺
ヘ　消毒房室
ト　檢溫器（攝氏ノモノ）
チ　安全受
リ　鐵杆
ヌ　凹溝

五四平方迷容積九二、八九立方迷にして室壁外面は悉く木板張にして東西の二面ゑは縦徑一、八八迷横徑一、六八迷の出入口あり木製引戸を嵌裝せられ南北の二面には縦徑一、〇〇迷横徑一、六八迷の窓四個と具有し共に木骨の硝子戸と備ひ横開し得窓の高さは土床面より一、三九迷上部此部は木板と以て腰張とせらるなり四壁の内面は白堊塗なり此室の南北に跨り白堊塗の中隔あり爲めに東西の二室となり東室は未消毒室西室は既消毒室とす此の熱瀛消毒室の中央に消毒裝置安置せらる

西室卽ち既消毒室には一、七二迷の高さにして横徑二、八〇迷深徑六六仙　の木製棚あり三等せられ既消毒物の安置に供す（以上室の造構は大略あり）

消毒裝置は竈釜消毒房室より成り各部の造構下の如し

（其一）竈

竈は練瓦製方形物にして高徑〇、六四迷横徑一、一八迷前後の徑一、二〇迷全積〇、九〇六二四立方迷を有し東面の中央には高徑二七仙迷横徑二四仙迷の燃口あり其直下に高徑一三仙迷横徑二四仙迷れ通氣口あり共に鐵製れ戸扉を有し此れを閉鎖するときい鐵杆ゑより固く閉ぢ得るもれゐして恰も「ストーブ」れ戸扉狀なり而ーて此乃燃口は燃燒材料を送る口にして通氣口は燃燒材料と燃燒する際ゐ扉と開き竈内へ空氣を通ずるに供せられ竈内腔れ容積は約〇、三〇二〇八立方迷ゑして線狀排列乃間隙を有する鐵製目皿ゐよりて上下乃二部ゐ區分せられ上腔は燃口に通し燃燒材料を収容し下腔は通氣口ゐ通ず竈内西北隅ゐ圓形乃孔あり此れは煙突乃始端にして煙突は鐵製筒圓にして竈に接する部は高徑五〇仙迷乃圓柱狀乃石柱より煙突下周圍徑四〇仙迷にして西室に於て竈れ北側に位し高く屋上に突出し上端は圓筒狀にして一側に間隙卽ち吐煙口を備ひ尖端を以て終る此上端は二重にして吐煙口の中央に一葉乃翼を附す此れは風受にして上端は此れが爲めに廻轉し煙突内に風氣侵入を遮ぎる竈前には横徑一、一八迷前後徑二〇仙迷深徑二仙迷の石の凹溝あり其南端に縦横深徑共に二〇仙迷の凹の部あり銅壁なり此れには水を盛り消火の用に供す

（其二）釜

釜は鐵製ゐして口徑四九仙迷の圓形口を有し深徑五七仙迷内容約二拾里垤兒にして竈上に安架せらる此釜と消毒房室との間ゐ高徑三〇仙迷にして上口直徑

三四仙迷下口直徑五一仙迷の木製圓桶あり表面褐色に塗ふる釜消毒房室との觸接面には「ズック」製の繩環嵌止せられ蒸氣の逃遁を豫防す

（其三）消毒房室

消毒房室は縱徑一、〇三迷横徑〇、九一前後の徑一、一六迷全積一、〇八七二八立方迷の方形褐色に塗ふれたる木造金櫃樣の室房にして高徑三〇仙迷横徑九一仙迷四隅に支脚を備ひ竈の直上ゐあり木造褐色の消毒房室受臺上に安在す下壁には圓桶開口す而して前後面に通して縱徑九五仙迷横徑八三仙迷厚徑四仙迷の戸扉を有す四壁の厚徑各八仙迷にして壁内縁より外縁ゐ向ひ四仙迷深徑五仙迷の欠損部内縁に沿ひ繞り其面には毛布の固定あり此れ扉の密鎖を謀り蒸氣の外遁を避き通氣の憂無かゝんが爲めなり而して房室内容は約〇、七四四九二八立方迷にして内面は悉く銅板張にして下壁の中央に直徑三七仙迷の圓形銅板あり此れは蒸氣釜の蓋にして一五密迷の口徑を有する小圓孔五個を備ひ其下面に同口徑同數の孔を備ふる圓き銅板あ；直徑三一仙迷にして動移し得此圓果の動移により蒸氣蒸發孔の口徑を大小適宜になし得るものなり上壁には中に圓口あり口徑四五仙迷にして安全管開口部なり安全管は銅製にして一一仙迷上壁上面より突出し鉛直にして上端儘かゐ膨大ー銅製の被蓋を被もる全管被蓋の上端は鎭銖製連鎖により上壁上面に突出する鐵杆ゐ連續す安全管開口の部前部に小孔あり此れ撿温器を挿入する孔なり而して此消毒房室の内腔は二牧の木製ゑして間隙を有する籠樣の中隔ゑより三等分せゝれ三小房となる

今此の消毒裝置を使用して熱氣消毒を行はんと欲せは釜に水を滿し可消毒物を消毒房室内の籠樣中隔上に載せ戸扉を密鎖し燃燒火力により蒸氣を發せしめり消毒房室内に導き攝氏百度の温に達せしむ三十分時ゐして熱氣可消毒に普達するゐ至る此の燃燒材料は雜薪にして夏冬平均一回ゑ二六幾魯瓦蘭謨を要し十五分時の消毒は稍々安心すべく三拾分時の消毒は確實ゐり

○美甘氏の「眼瞼成形小技」を讀む

岡本京太郎

美甘氏は中外醫事新報第三百九拾六號（明治二十九年九月二十日發刊）ゐ於て「眼瞼成形小技」と題ゑ本邦特異の眼相と論して美術的成形手術と公にせゝれたり予大に氏の觀察の精緻ゐると術式の巧妙なると賞贊すると同時ゐ歐人ゐ糟粕と讓るの愉快と得たると感謝する

也爰ゐ淺學の笑を辭せず聊か蛇足を畫き驥尾を撫する者は陰ゐ氏の垂教を釣ふんとするの微志のみを乞諒焉

本邦固有の皮目氏の所調被瞼單瞼なる者の記載は嘗て河本博士「日本人の眼相」と題ゑて(東京醫事新誌)世人の注意を引きゑを以て嚆矢とす其解剖上の觀察生理的の說明は瞼擧筋より一部の纖維を派出ゑ眼瞼輪匠筋の纖維間を穿通ゑて瞼皮ゑ附着するか故ゑ眼瞼擧上の際其ゐ收縮ゑて皮膚ゐ陷沒を生ゑ爰ゑ複變則ち二皮目を現はゑと云ふゑありて美甘氏乃論述と異らさりき次て大西ドクトルは「一皮目二皮目れ辨」と題ゑて(東京醫事新誌、中外醫事新報)極めて詳細ゑ之か研究成積を公ゐせられたり其論旨ゐ全ゑ河本氏乃所說と異ゐゑて眼瞼皮下結締織ゐ「ファクトール」とゐす約ゑて之と云へゐ其結締織は瞼緣に近くに從て緊密にゑて之を遠かるに從て緩疎ゐるか故ゑ甲れ皮膚ゐ軟骨ゑ固着ゑて運動に伴隨ゑ乙れ皮膚ゐ軟骨に固着せすゑて其運動ゐ從ゐさる者とす是ゑ以て瞼擧上れ際ゐ緩部皮膚に剩餘ゑ生ゑ緊部乃皮膚上に垂れ其境界に溝を畫ゑ則ち複變と現ゐすなり且つ本邦人乃生理的一皮目ゐ多くゐ其緊部僅少にゑて皮膚乃殘剩多ゑ溝ゐ瞼緣に接在するを以て複變ゐ睫毛ゐ達ゑ彼れ溝を見る能ゐさる者にゑて却て二皮目より皮膚弛緩多く歐人眼瞼れ皮膚軟骨に固着ゑて緊張せる者と趣を異ゐせりと則ち大西氏は一皮目を以て二皮目と大差なき生理狀態と見做すも河本氏美甘氏は瞼擧筋分纖維の欠損症と主張せるか如し

美甘氏前已ゐ如此報告ゐり氏獨り先鞭の意氣ゐるは予の敬服する能はさる所なり而して氏の蒙眼河本氏と相投す予や愚久しく其何れと服膺すべきやに迷へり敢て問ふ實地上所謂兩眼單瞼の者にして瞼擧筋「パレーゼー」を患ひ爲めゐ重複瞼となると屢なり大西氏の論によれは擧上作用減退して瞼幅增加し一皮目の皮膚剩餘ゐ減少して二皮目ゐ變するなりと理解し得べきも河本氏の說に從ひは筋收縮力減退するか故に溝を生する能はず却て二皮目も一皮目に變し一皮目は益々下垂せさる可らさるの理なり此矛盾如何に會得すべきや或は此小纖維たけ「パレーゼー」を免るゝや

美甘氏は其調査に於て單瞼者は百人中十七八人の成績を得しと以て複瞼こそ生理上の正當なる者ゐして彼の窄隆部の如く瞼の一上一下に應する作用を有し單瞼は最も多き欠損症ゐらんと信するか如し是れ予の調査ゑ異る所ゐり予は嘗て徵兵撿査の際壯丁八百一人ゑ就て左の成積と得たり

●雜　錄

兩單瞼　四一八人(五二、一八%)
兩複瞼　三二五人(四〇、五七%)
右單瞼　四八人(五、九九%)
左複瞼
右複瞼　一〇人(一、二四%)
左單瞼

壯丁(加賀能登二國の產)は勿論二十一歲の男子として五尺二寸以上の無病者を撰み眼位は靜に同高の六Mの距離を見るの際を規とせしを以て生理的れ眼相として差支なきと信するあり女子れ統計と有せざるは大ゴ遺憾とす

右れ統計ゴよりて見れは單瞼い複瞼より多く右單瞼乃者は右複瞼乃者より多し故ゴ予をして遠慮なく之を云はしめは正に美甘氏ゴ反して單瞼却て生理的正當乃者にして能く其運動に適應すべく(大西氏乃說に從ふて爾云)右單瞼乃多きは右眼使用乃多犯に備ふるゴは非さるなきや

氏乃貴重なる統計にして其性年齡健否の關係眼位正定の方向を記載せさるは予に隔靴搔痒の感を與ふるあり其他氏乃擧示せし年齡疾病形狀位置等ゴ關する諸件は予も大に左祖する所なり

氏の術式及其成積は於ては只夫れ命を聞くのみ氏は術後の作用を擧瞼筋說に歸納して實に間然する所なしと雖とも予の偏癖亦大西氏の說を以て演繹せん則ち手術後の瘢痕組織は沃丁線の部に於てのみ皮膚と結合し其より瞼緣迄は所謂緊部の狀態となり其より上部の皮膚は同く弛緩ーて緩部の樣姿を保つか故に此線部ゴ屈折して溝を生する者と看做して不可ゐきを信す妄言多罪

○赤痢病發生傳播の原因(順天堂雜誌轉載)

S.S　生　抄

赤痢れ病原は未た定說なしと雖とも此年流行れ實歷によりて考ふれば其病毒は有機生体にーて患者れ糞便中に含有ー有機性の物体及汚穢なる物質れ浸染土壤其他糞池、塵溜、下水等れ如き濕汚の場所に於て蕃殖滋蔓ー飲食物殊に飲料水に伴ふて人躰に侵入するもの丶如し世に空氣傳染れ說ゐるも信するゴ足らず而して病毒傳播れ媒介をゐすものい卽ち人体にーて各人の交通ゴより之を各地ゴ運搬するや疑を不容、又氣候の寒暖い流行の經過に關す卽ち暖地に在てい概ね風土病の狀態をゐーー容易に消滅せず寒地い冱寒の季節に際すれい一時蟄伏するも尙ほ其機能を持續し翌年春暖の候に至り再ひ萌芽し漸次流行を起すに至るや疑と容れさるもの丶如し然れとも越年の病毒より直ちに多數れ患者を發生

するに非す其病毒ゐ感染したる新患者より排泄ーたる新鮮活潑なる病毒れ爲に甲感乙染終に其勢を助長するゐ至るもけとす換言すれは越年の病毒は勢力徴弱ゐるか故に一回人体を通過するたゐらざれは其猛勢を逞ふることと能いす此病も免疫性を有し其期限は數十年れ長きものたるや疑ゐし此等の事實は他の傳染病に於ても其類例に不乏而ーて傳播原因を総括すれは左の五因に不外

第一因　赤痢の病症たるや其來る甚た緩慢にーて前驅下痢(己ゐ病毒を含有す)の間は勿論輕症のもの又或は末期重症ゑ變するものに於ても初期に在ては患者自身も亦劇烈傳染毒を有する赤痢病たると知らず而ーて罕に悟るものゐるも本病は古來より耳目に慣れたるものなるる以て痢病なり赤腹ゐりと唱へ恬とー恐怖の念を起さず爲に醫療ゐ就かざるは勿論相當の手當をもなすもの少ーとす尤も嘗て此病毒を蒙りたる家族等ゐ在りては畏怖すべき病症たると覺知ー少ーく徴候あれは速に醫療を受くる者なきに非らざるも此等は己に數度流行ーたる町村ゐ於て見ると得るも新病地又は山間僻邑にては依然とーて舊体と變することなー是れ一い醫師の欠乏ゐ歸因するものなりと雖とも一般の人情未た初期に於て速に醫療と受くるの利を悟らず先つ灸と點し賣藥と服する等專ら療治となー消毒等のことは夢にも之と知らざるに因る偶々醫療と乞ふものゐるも初發輕症の間は醫師の其診斷ゐ因循ー漸く進んて血便と認め初めて正式の屆出をゐし若し患者の死するときは腸加答兒、下痢、中暑、蛔虫、老衰病等れ病名と附して死亡屆となし此場合に當て田舍れ習慣として多數れ人民喪家に集合飲食するも死者の病名赤痢に非らざると以て傳染病の取扱をゐさす病毒附着の衣類を洗滌したる汚水と隨所に放流し加ふるに看護人い飲食の調理をゐし不知不識の間ゑ病毒と散亂せしむ是れ第一因也

第二因　豫防の要訣い隔離法の厲行に在り家屋の構造其他一家衛生上の狀況をも顧みす妄りに自家療養をゐさしむるゐ於ては到底豫防消毒の完全を期する不能其實況を約言せは本病の他乃傳染病ゐ比ーて經過最も長く加ふるに重症患者に至ては晝夜數十回の上厠に根氣全く尽き終に身体の自由を失ふゐ依り他の介抱を煩いすこと極めて多く毒便附着汚物を山積し看病人も心身疲勞乃爲め萬事不始末勝とゐり殊ゐ看病の傍ら老人幼兒等の世話もゐし且つ飲食の調理を

も取り扱ふものゝ至てい注意の固到と望むへかゝさるは勿論ゐーて終ゐ一家擧けて病蓐ゝ呻吟する乃慘狀を見るゐ至るは免れさる數とす(下畧)是れ第二因の重ゐるものゝゐり

第三因　避病院を建設ーて患者を離隔するは病毒の傳播と防くゝゐりと雖とも病毒已ゝ散蔓して一家數人枕を並へ各町村擧けて慘狀を呈するゝ至りては離隔乃効能最早や晩きに失するに拘ふず此場合ゐ望みて狼狽避病院を建設するは恰も火乃起るを見て始めて消防組と組織すると一般殆んど其効ゐきゐり況んや此等病院は假説にーて造搆粗雜專任醫師及看護婦を置かさるもの食事の患家自炊に係るもの等ゐるに於ては何ぞ其効を收むるを得んや町村避病院の景況概ね此の如ー之に依り自然人民忌避隱匿乃情を釀す是れ第三因ゐり

第四因　消毒の方法は叮嚀周到を要するものゐるに拘ふず當局者平素此ゝ意を注かず患家に對する消毒は初期及末期の兩回に止まり糞便は勿論衣類器物なて患家の爲す儘ゝ放擲す是れ第四因ゐり

第五因　死体及穢物に近接ーたるものに近接するも當局者自ふ之と忌避ー妄りに恐怖の擧動をゐー消毒の周到ゐふさる是れ第五因ゐり

以上は順天堂醫事研究會雜誌記載にして內務技師柳下士與氏赤痢病調査復命書中より節鈔せるもの

K. o 生

○醫家用製劑集

(1)亞細亞丸

亞砒酸　〇、一　　胡椒末　一、〇

甘艸末及甘艸X　各適宜

右研合爲百丸

(但し一粒の含重量〇、〇七)

(2)重硝酸

重　曹　二、〇　　硝　蒼　一、〇

(3)下腹丸

大黃末　五、〇　　蘆　薈　五、〇

餾　水　適宜

右煉和爲一百粒

(4)制汗丸

硫酸アトロピネ　〇、一

蜀葵末及アラビヤゴム末　各適宜

右克く研和爲四百丸

(但し一粒中〇、〇〇〇二五分の主藥を含む)

(5)結麗丸

ケレオソート　一、〇
ゴム末、甘艸末、リスリン　各適宜
右爲百丸
（但一一粒重量〇、〇七）

(6)大結丸
ケレオソート　一、〇　綿篤兒　一、〇
水飴、甘艸末　各適宜
右爲五十粒

(7)甘巴散
甘汞、蒭刺巴末　各〇、三　乳糖　一、〇
右一劑爲一包

(8)沃萇球
沃剝　〇、二　萇宕X　〇、〇五
カヽオ酪　三、〇
右爲挫藥一個

(9)クレオリン球
クレオリン　〇、一二　カヽオ酪　三、〇
右爲一個挫藥

(10)結砒丸
亞砒酸　〇、〇〇一五　ケレオソート　〇、一五
甘艸末、アラビヤゴム、リスリン　各適宜
右爲百丸
（一丸ノ重量〇、〇七）

(11)刺劇軟膏
硝蒼　二、〇　ペルバルサム　二、〇
ワゼリン　二〇、〇

(12)規鐵丸
硫酸キニーチ　二、五　硫酸鐵　二五
ゴム末、甘艸末　各適宜
右爲百丸
（但し一丸ノ量〇、〇七）

漫錄

◎老婆心　會員　澤賢吉

曰く白山、突兀として天を衝く海面を拔くこと八千四百尺、曰く信濃川、滾々として海に注く蜿蜒流れて百有余里、此の山此の水以て北陸を形成す、汝北陸偉大なる雄壯なる所謂天地正大れ氣磅礴する所豈に偉人なくして可ならん、宜なる、哉、錢谷五兵衞は此の山に生を一葉の布帆を「マスト」に飜し「ヲモ」舵「トリ」櫂、九万の鵬程を蹴て南洋、北律濱を蹈破せしは非ずや、不識庵は

此の川に艀化して東北を蹂躪し、鋏蹄の蹈む所、鐘鼓乃響く所、魚界虫艸靡かざる者なく越山併能州景を吟せしめしに非ずや、吾人北陸の青年之を見て衣骭袖腕の感ありきと得ん、否ある世人に向つて須ふく男子此の最極得意の好天地に在るの幸福と賀せざるを得んや

然れども遂に五兵衛は空しく涙を呑で砂上に立てふれし十字架頭の鬼と化し、謙信は腕と扼して肌寒き野邊の夜陣に冥界の人となる、五兵衛逝き謙信去りて年を閲する幾十百轉、數へて今日に至れば豈に短日月と稱するを得ん、然ども二氏去るの後吾人の肺肝に銘ずるの二氏なれを如何せん、東南は山脈の連々たるあり西北は日本海の渺々たるあり、一は矗立百丈一天冷かなれば雪粉々飛んで鵝毛乃如し、一は怒濤百丈一天曇れは勢天を劈き海底の藻屑と消え去りぬ、故を以て東方の人遊ぶと罕れに西方の客訪ふと少おく、北陸は只地理學上の名稱として書冊の裏に印刷せらるゝ而已にして寒天僻地と共に世人の念頭に撫けふれざりし、其れ然り山靜似太古の北陸柔弱に流れざるんと欲しても豈に得可けんや、士人は只太平無事たるを知つて、宇苗の大なるを知らず乾坤の偉ある知らず一秒一時一瞬一轉姑息の安逸と貪ぶるを以て最上の祈願とす、吾人北陸の青年思ふて此に至れば切齒憤扼の慨なきを得ん、否ある天下に向つて此の最極失意の惡天地に在るの面目なきを如何せん

殊に維新の際、薩長の爲めゑ一敗地に塗れて勝ては官軍敗くれば賊、東北の人士は枉げて賊名を帶びぬ血あり涙あるの士祖宗百戰の山河ゑ對して感慨なきと得んや、悲風苦寒は彼れ等の志氣を堅牢なふしむるに足り、一冬の積雪は彼等の思想を高潔なふしめんとするに反して、彼れ等は唯に安逸たり氣樂たり、安逸氣樂卽ち世界知らずの高枕は化して遊惰となり、遊惰は卑屈となり、卑屈の感化は布ゐて子孫に及ぼし子孫は之を其の子孫に及ぼし降り傳へて明治照大の今日に至り一般人士尙其餘襲を脫せず殊に學界の先鞭者として許すべき我が刀圭社會に於て往々斯の如れ者あるに至りては斯道の爲に惜まざるを得んや、勿論一部の少數ゑ過ぎずと雖ども彼等は只患者の機嫌を伺ひ、病家の主婦に膝を屈しれ世辭は彼等の「ステトスコープ」たり愛嬌は彼等の「バランス」たり、歌舞妓場裏闘州菊五の輩今日尙ほ曲鬢彩衣の滑稽的人物を扮裝するい焉んぞ獨り封建時代を寫す而已ならん、余をして尙ほ忌憚なく有体に言はしめんか、是等一部の輩は幇間者流に擬せざるとき

は醫者たると得ざるとの觀と持するなふんか、請ふ見よ今日數萬の醫師身に寸鐵と帶びずして病癒の敵軍と平和の戰爭せる紳士として遇すべ𡿨價値と有する者果去て幾何かある、然れども事今日に至り敢て既往を罰する能はず、只夫れ將來として改造せしむ可𡿨者なれば、吾人青年れ責任豈に大なふずや

金澤れ地たる醫學校舍を起せる己に數十年、學生乃集りて其業を受くる年に數十、醫士乃製造所として國中第二位にあり、殊に近來に至りて尤も盛と極む、醫學部内ゐ於て十全會の設立せふるゝ豈謂れゐしとせんや其主旨に曰く勅語の聖旨と遵奉するにありと善ゐ哉勅語聖旨を遵奉して醫風の矯正、師長れ尊敬學界の獨特、相互れ親愛、豪壯乃氣風、朴直乃風性、入つてい膝と交ふる談話會となり出でゝは野田山腹の健走となり揚氣の發する所、知らず識ふず日本男兒の特性を涵養せしめん」聞く或る都市に於ては醫學生中、糸竹管絃、美衣麗袴を事とし朝に籠氏の内科を抱ゐて妓樓の主婦に送られ、夕に智氏乃外科を賣りて愛妓の膝に華胥と夢み、奢侈の敝風蕩々として拔山倒海乃勇力を以てするも之を抑ふる能はざる者ありて、多數の人士は之を指彈するとかや、吁嗟宜なる哉、世人は軍人を以て男子最活潑の模範とし醫士を以て最柔弱の標本とし一は之を無上乃位置に居𡿨一は之を最下乃品位に伍す斯道れ士焉んぞ一滴十滴將た百千滴の涙を出さざると得んや、見よ「ガットリング」銃や「クルップ」砲や水雷艇や三十二糎れ巨彈を運用する軍人獨り雄壯ゐらん、赤十字の旗は初て亞細亞人乃手に依りて亞細亞の陸土、遼東れ野よ耀然たる慈悲の光を輝せしゐ非ずや、一臺乃顯微鏡は日本人の手に携へられて鑾煙硝雨の香港に於て「ペスト」菌を發見せしゐ非ずや然らば軍人獨り活潑ならん醫士獨り柔弱ならん

今や電話は架せられんとし電氣は燈せられんとし北陸、能州、金城の鐵軌は走らんとし、今迄太平の春眠曉と覺ゑずして就睡せし者が此鞭撻に驚かされ活氣頓ゐ加いり來り文明の氣風切りに輸入し來るとゑは桃花流水別乾坤に悠々たりし北陸別して金城も最早「櫻カザシテ今日モ暮シッ」の氣樂ゐる生活を持續すると能はざると共に都人士の敝風海嘯の怒天破地の勢にて注入し來るや必せり然るとゑい我が金城の學生殊に醫學生に於ても之れに感染するものゐしとせず、豈寒心すべけんや

此の危機一髪ゐ際して余の金城鐵壁と頼む者只其れ我

が十全會の一ある而已吾輩の十全會に望を囑する豈少しとせんや

◎須ラク一年志願兵タレ　天地生

サー斯樣に切り出すと何だか鹿爪らしく角が立つ樣だが、實は左程ゐはやられぬのさ、抑も一年志願兵ちう者は、他の兵士が三年間勉め勵でも、充分でないと云ふ陸軍的の生活、作業を、僅かに六ヶ月や一年の間に敎へ修めて、一つ乃幹部をこしらへいやうと云ふ御上の御意、夫れだから、中々一通りや二通りの勉强では卒業は六ヶ敷へ、然し陽氣の向ふ所ろ金石も亦た透るてふ意氣込みなれは、大丈夫虎の皮の褌子さ、

所で、諸君は陸軍は辛ひ苦しひと御思ひなさるだらうが、然し是れは全く然し乍ふである、北風枝を鳴ふし六花粉々として飛び廻はるの頃ろ、銕砲を棒げて不動明王の二のまいをやるのは誠に寒い、つめたい、指も鼻も落ちさうだ、又た炎天に栗ヶ崎の砂山を駈るは大に苦しゐ、丸で日射病でも起りそうだ、本統に腦味噌が煮ゐ返て、今までも頭の鉢が割れるかと思ふ位だ、然し乍ふ、之れは當然のことだ、社會の實業海へ漕き出る思ひをすればなかなか容易のことである、今ま迄で、嬰兒の慈母に於けるが如き心地で、學校の先生ゐ「ヤシチヤ」許り、こねて居たが、陸軍へ入るとそれは出來ない、規律は正しく、規則は嚴重だ、是れは中々體が窮屈だ、丸で四角の箱を嵌められたかの如く思はれる、然し乍ふ之れは當然乃ことである、何故なれば、とは、云ふ迄でもなく、十九世紀乃今日ゑ於て東洋に雷名を輝した、然も、世界最大强國と云はるゝ國が恐ぢ氣を抱た、ゐへん畏を多くも神武天皇卽位以降二千五百餘年皇統連綿たる日本帝國乃ち取りも直さず開闢以來未た嘗て一回も外國人の辱しめを蒙りたることのゐた神國豐葦原の千五百秋の瑞穗國を守り堅むる干城だもの、若し此の干城が無規律ゐ製造された曉には、何を以てか日淸戰爭の大勝と得ることが出來ましやう、して見れば、規律の正ひ規則の嚴重なるは理の當然と謂ふ可しだらう、諸君も常に歌ふじやないか「笑て飛び込め散兵線」て、是れ丈けの勇氣が有れば、辛ひの苦しひ乃と云ふことがあるまい、何の陸軍だからつて無暗に人を殺すぢやゐし、成る程ど士官さんは不斷鬼乃樣ゐ怖ひ顏をしては居れとも、其れ心に到ては「シキシヤノヤマトコヽロヲヒトヽハバアサヒニニホフヤマサクラハナ」さ、其處で或る方では、一度覺ゐた學問が退行運動となすと云ふ慾張り主義を持て御出る、すると僕は忠と云ふ一字を以て其向ふ

を張る、何だ君の御馬前では一つしかない命を投げ出すと云ふ程の者、少し許り忘れいたかつて、かまうもんか、本を讀めば又た覺るは、とこう愈々軍人の本分が出て來ると、向ふではさ―大變と、辛も苦も損も何も謂はれぬ事に成て來る、其處ぞ又德はと聞く奴が出てくる、其の德は、澤山とも澤山とも中々五枚や十枚書ゐ付ても、盡されぬ、丸て歸天齋正一の寶箱の樣ゐ出てくる、先づ第一に身体の强壯藥、是は如何なる大國手でも知ふない妙藥だ、今ま迄て「天下を蹂躪す七すれ鞋」なんかんて、自分許り豪氣がつて居て、いざ謙倉と云ふ場合ゐは、(ニ)の字足を先きだてる人も、實際强くなつてくる、だから一度び軍旗乃下に起臥する時きは、再び其の眞味と意るゝことが出來なくなる、すると一月二月を經る內に、體はずん〳〵肥てくる、力は就く、さ―一食三椀兎ても駄目ぞ、丼鉢ゐ五六抔は虻蠅乃樣になる、其處ぞ下宿屋には一人前の食料ては此方ゐ損がと、斷りを云ふ、處で何ゐ貴樣此腕の怒鳴りが聞ゐぬかと云ふ、すると下宿屋は靑くなつて、夫婦の相談、結局飯を多く食はれるよりは甘薯でも食はれる方が增しざと、翌日からい燒き芋と盆に一杯持てくる樣にある、然し下宿屋あんかで、腕の怒鳴りを見せるゝ、陸軍の小勇と云ふ、軍人の大禁物であるかふ、めつたゐ出してはあふん、然し實際と云ふと斯樣のものさ、こうあると此方は益得意た目方は日に增し重く手足ゝ一月一月に太くある、處て、病氣などゝ容易に試合を申ー込まないとくる、於是、極暑ても嚴冬ても夏犬や寒猫の樣ゐある心配はない、常に春駒れ如き勢を以て一ヶ年を經過ーて、本職ゐ取り付く、體が丈夫だかふ、するとなすとが面白い、夜る夜中二人が賴みに來ると直ぐ飛び出す、其處て第二の德の信用が就く、第三の德の流行ゞ就く一年間五十圓や百圓出して遊んた金も、二月ゥ三月の內に取り返さきる、れまけゐ正何位とか何々とかて、、初め自分が恐がつた士官さんにも氣取らきる樣にあるして見きゞ是きが卽ち飯粒て鯛と云ふ法ていざざふぬか、此の外か、第四第五と順次ゐ其の德を擧ぐれば、前にも云ふた通り、雜誌の本文より、効能書が長くなるから、先つ此の邊て切り上げとしませう、未た夫きゝ無代價て販賣さきぬ一種異樣の風味がある、之きは夫れは特約口傳と致しやせう

◎鐵腸漫錄

松原鐵腸

(其一) 鐵腸漫錄の本領

人各心あり、旣に心あれば、必ずや情を發せざるべかふ

ず、既に情を發せば、必ずや之れと外界に顯はさざるべからず、是れ自然れ數なり、若し夫れ事に感して腦裡に印し、物を激して骨髓を轍するも、深く隱蔽して肝膽の裡を埋葬ち、唯々默々として生と終ふば、兼好も云へる如くに、腹ふくるゝの思あり、如何を經國濟世の傑論を抱き、拔山倒海の才謀を藏むと雖も、毫も世と益するとなく、所謂醉生夢死と何ぞ擇はん、然るを社會まは、之を反し、只管巧言以て先輩を雷同し、令色以て高貴に諛諂し、常に左顧右窺、社會の風潮をよりて其節を換へ、踏跼逡巡、朋友の言語を阿從して其筆を抂げ、自ふ其醜を耻ちざるものあり、試みに彼等の胸腹を解剖せば、骨なく、血なく、定見なく、抱負なく、到る處名譽と利欲とを以て充盈せられ、只ざ心にもなき甘辭を捧げて、難有き纏頭を貪らんとするものにして、終に自ら名譽の淵を溺死ち、利欲の谷を顚覆せんとするを悟ふざるなり、亦た憐むべき乃至りなふずや、余不肖と雖も幸に腸鐵あり乃ち、時に臨て鐵腸を反射するもの、細大を問はず、輕重と論せず、悉く之れと錄して、漫りを本紙を汚さんとす、之れ鐵腸漫錄と題する所以なり、然れとも余固より蘇張の舌なく、韓柳乃筆なし、故に雄渾莊嚴勁拔沈痛、現今の操觚家として避易せしめ、後世畏るべしとなさしむるれ名文に至りては、余の敢て企て及ふ所にあふずして、別に其人あり、加之余輩業と受くるる、日尙ほ淺くして、未た醫學の門戸い窺ふを至ふす、若し夫れ深宏達識、天下れ刀圭社會をして、後に瞠若ふ一めんとするの卓說に至りては、既に其人あり、然らば余輩に囑するに、醫學上の卓說や、文學的の名文を以てするは、酷中の酷なるものにして、恰かも肝臟をよりて呼吸を求め、病餘の羸瘦者を一て、萬鈞れ鼎を捧げ去めんとするが如し、地軸既に倒れ、木を緣りて魚を得るも、何ぞ此囑望を達するの日あらんや、余い唯ざ俗界の羈束を離れ、愁々と去て自適圓滿れ理想界に遊び、綽々と一て獨立不羈れ言論界に遙はんとを願ふのみ、右せんとすれば法律の束縛と蒙り、左せんとすれば道德の制裁を憚るれ現實界を、何を樂んて之に齷齪せんや、夫れ余が性不文なりと雖も、而かも自ふ任する所あり、徒ふに綸爛綺縟豐麗柔婉、以て俗眼を眩耀せんとするは、余の取ふざる所なり塵俗の褒賞貶罵何かあらん、余不敏なりと雖も、而かも鐵腸あり、富貴名譽も之を服從せしむると能はず、權威腕力も之を靡從せしむるを能はず、彼の只管辭を甘く去、語を低く去て、先輩朋友を籠絡せんとするは、余れ欲せざる所なり、唯た物を感去て骨髓を轍去、

事ゐ激えて腦裡ゑ印せるもの、乃ち之れを鐵腸漫錄ゑ網羅え、其文体に至りてゐ、機に臨み、時ゑ應して、散文あらん、律文あらん、短評あらん、長論あらん、和漢文あらん、歐文あらん、たゞ筆の向かひ、意の動く所に任ずるみの、然れとも惜らくゐ、余未ゞ黃口の書生たり、學識淺く、見聞狹く、其論する所或ゐ天下の諸氏と見解を異にするもの多からん、慈愛なる諸君子、希くは訓諭誘掖の勞と吝む勿れ、若え聊かが自信する所あるに至ては、斷然戰端を開ケ、一歩も讓る所なかるべし、既に墨水尽き、筆莖碎くるも、何ぞ止むへけんや、唯た清曠卓落光風霽月の如く、公明正大俯仰天地に耻ぢず、漫然宇内ゑ濶歩えて、毫厘も世俗の風潮を伺ひて、其本領を枉ぐべケにあらず、是れ我が鐵腸漫錄の本領とす、而して我が此本領ゐ、天地の定る限り、日月の照る限り、長へゐ香を放ちて造次も換るとなかるべし、今般十全會雜誌の發版せられ、鐵腸漫錄を揚ぐるに先たち其本領を宣言するとゐ爾り

（其二）　鈴木先生を懷ふ

人相會するに臨んで、歡悅の意に狂し、相別るゝに及んで愁嘆の恩に驅らるゝは、人情の常にえて、毫も怪む所ゑあらず、況んや子弟の恩師に於るをや、是れ余の默文を卿ーて、先生を懷ふ所以なり、蓋し我師や、天賦英邁にーて追從と賤み、其決する所ゐ、斷々乎として之に向ひ、百千の艱難、世人ゐ誹謗、敢て意とせず、才幹幽遠にして蘊奥を究め敢て腐儒の窺ひ知る所ゑあらず、言語寡ふして亂るゝなく、而かも懇到諄々倦まず、學止沈豪質朴にして、花巷柳街ゐ影を蹈まず正さに春秋に富み烱々たる眼光、人乃心底を看服え去るの概あり實ゑ學殖德行兼ね備ゐり、夙に斯道の本繹と以て任せられ、聲閥中外に嘖々たるもゐ、誰れか之を怪まんや、回顧えれば、鈴木恩師、氣笛一聲、金石灣頭と辭したるは、昨日の感あるも、光陰閃電の如く、既ゑ數旬の後となりき、嗚呼我が親愛なる恩師、今何處にかある、夫れ余の業と先生に受ゝるや、年と重ぬると二度、月と閱するを二十有四、其間日とーて恩容ゑ見ゐざるゐなく、時として慈語に接せざるゐなく、親乃如く敬し、子乃如く愛せられたり如何でか戀懷の情緒に堪へざるを得んや噫椅子は依然講堂の中央ゐ立てりと雖も先生の恩容や已に莫え、實習室に於ける數多ゐ標本ゐ、尙ほ整然排列せらると雖も、再び先生の慈語に接する能ゐず、嗟吁……万解の暗涙覺ゐず頰と掠むるを如何にせん、去て金石海濱に遊べば、先きに恩師を送りたる船は既に影なく、

永く名殘を惜みたる黑煙い、飛散して跡ゐー、思ふに今や獨乙の空ゐ迷ふならん、無情なる靑雲蒼波、遠く連りて望み難き、況んや談ずるとや、千里遼遠、白雲の浮ぶ所、此れ我師の在る所か、颯々たる松籟徒らゐ我が鐵腸と傷ましむるのみ、追慕の情勃々胸を衝きて永く止るに堪へず、則ち家に歸り、破窓を開け、孤燈の下、强て頃日好める新體詩を繙くも、心此處にあらされば、見れども見る能はず、讀めども讀む能いず、蚊群の文々と叫へるい、亦た未だ見ざる先生を慕ふか、仰で天を恨めば陰雲四方に漲ぎり、朦朧たる釣月、悽然微光を放て余を憐むが如く、俯して地に哭せは唧々たる露蟲、聲を低ふして余が心と汲むに似たり、加之、肅々たる霖糸、漸く竹葉を襲ひ、簷端は玉水、寥然闇黑に響くに至ていい、感窮も覺ゑず絕叫するも孤燈答ゑず、四隣寂莫肅條として、兀坐禪僧の如き、此に至り益々鬱悶感慨惜く能いず、爲めに鐵腸斷たれ、思慮亂れて、前後爲す所を知らざるもの每度ぞや、晝夜造次も先生と追望せさる時ゐ」、只だ長大嘆息するれみ、呼息乃水蒸氣精靈ゐらば、願くい昇り空を翔け、以て君が袖と沾せよ若し夫れ炎暑骨を溶かすの日、睡魔襲て止ます、乃ち半時の閑と竊て、裸朴輾轉、華胥の野邊を辿り、終に夢醒めて枕ゐもたれつゝ、微かゐ眼瞼を開け、天井を眺めんか、忽ち叱咤我を責むるゐのあり、何ぞや柱に懸れる先生の影像卽ち是れゐり、烱々たる眼光、莊嚴たる姿勢、我安んぞ橫臥して之れゐ對するを得んや、加之、口云はんとして開け賜いさるい、云ふにいや增して、我胸中に轍するを益々深し、此に於て端然机に向ひ、書籍を繙きたるは、實に余乃終生忘る能いざる一大實驗ゐり、然れども乞ふ、徒らに悄然嘆概ゐ咽ふを止めよ醒て他の方面より觀察せば先生や、名譽の月桂冠を載き、遙かに等倫を超ゑて學林する玄妙と他邦に探らんとするもれ、固より先生乃希望にして、亦た余乃誇稱する所ゐり、我亦た鈴木博士れ歡迎場に立たんこと、蓋し遠きに非らざるべき、嗚呼羨むべし、歐州れ山河や、「アルプス」乃雪皓然千古の姿態を更ゑず、以て其思想を强くするに足らん、「ライン」の水潺々萬里を濕し、以て其鬱氣を洗ふに足らん、蓋し歐土は、鴻學碩儒れ巢叢にーて、文化の輻湊する所なり、君夫れ魁乎たる天賦、蔚然たる才藻を振ひ、加ふるに戰勝國乃秀輩として之れに臨まば、必ずや學海の遺珠を探拾し、遂に歐土乃學儒をして、後に瞠若たらしめんと、余の深く信して疑はざる所なり、我師躊躇する勿れ、赤髯碧眼の徒何かあらん、冀くは辛苦勉勵、他日の大

成を期し）幸に國家の爲め、果た學林のため、異土の風候に注意して自愛を勉めよ、余不肖と雖も幸に先生の高風に浴するを得たり、何ぞ桔据勵學、以て其深恩に答へんとを期せざるを得んや、唯だ待たんのみ他日欵の一唱、文明の花卉を携へ、開化の紅實を齎らし、錦衣赫章、駟車轔々の擧の早からんとを、余先生を懷ふの余り、一篇の辭を草して、之を同友に訴へんとするも、憾らくは、如何せん生來の蕪筆、固より胸中鄙懷の万分の一と吐露すると能はず、況んや感窮るに於てをや、噫……噫、

◎嚼氷閑語　輪濤生

○歸省乃客

都下幾千の孤客今や業終へ或は暑を避けて故山に省す和氣靄然たる乃處父子兄弟一室に團欒して從事を語る其の談ずるところ果して何事ぞ汝之れを良心に問ふて疚しき處なくんば可なり

○綠蔭讀書

綠蔭蒼々炎光を掩翳し涼風颯々衣袂を拂ふ乃處携ふるところの書を閲けば心胸自ら清爽として飄然羽化登仙れ想あらーむ

○賣氷翁

炎威熇赫流汗淋漓机に倚りて卷を播くに堪へず此時に方て流汗洗ふが如く爽然涼を覺へ蘇息の思をなさしむる者唯夫れ賣氷翁乃賜乎、盛夏の候世人頭を延べて汝と待つ若し夫れ涼風一たび到れば則世人反顏顧みるものなし嗚呼榮枯盛衰は數の免れざるところか

○女子の涙

一滴國と興し一滴國を傾くゝるもの夫れ女子の涙乎楠母れ一滴正行をして奮起せしめ句當の一滴義貞として躊躇せーめたる以て知るべきなり嗚呼最も貴むべきは女子の涙又最も忌むべきものも女子の涙か一轉して玉となり一化ーて瓦となる世の婦女子豈に之を濫用ーて可ならむや

○地方の青年

潺々たる碧流峨々たる青山鳥歌ひ花舞ふれ境獨り社會の事物を攻究し晏然餘念なれもの吾人は之と地方青年に望むところの境界なりとす此境界は地方青年が最も愉快なる樂園として賞揚する處にして誰か又鬱悶の情あるべけん哉獨り怪む斯の和氣洋々たる樂園を措て紅塵萬丈の俗界を求むるに汲々たるものあるを

○海嘯と洪水

昨は三陸地方海嘯によりて幾多の生命幾多の財産を犧性に供ーー今又富山地方洪水の爲の生民と塗炭に苦まし

む天公何ぞ無情ある我曹是等被害地方の人士を痛悼して止まざるなり

丙申歳文月念六日

◎小　言

霜葉生

予曩きゐ本校に在りー時切ゐ會誌の刊發を希望せーも終に其擧あるを得ず、今や本校を去るに及んで、茲に其初刊を見る、多少の感なさ克はず

待ちわびて諦めし後はとゝきす

一二三

鐘聲紅樹裏。晚靄抹清潭。溪畔秋將老。人家一二三
瘦山開晚照。紅葉映清潭。風冷秋江上。浮鷗一二三

雜　報

○第四回通常會　十月十八日午後一時より、第四高等學校内に於て第四回通常會を開き左の演說談話ありたり

第一席（虎列刺治療血清に就て）　醫學士野田忠廣君登壇、本年若し虎列刺病の流行あらば患者に試みんとの目的を以て豫て該血清製造に着手したることを序し次て北里博士の虎列刺血清の動物試驗、患者試驗の成績大要を述べ次ゐ本年三月より九月ゐ亘り氏が自から兎「モルモット」山羊及び馬等ゐ就て該血清製造を試みたる順序成績を詳述し其免疫山羊の血清を採集して動物に試み其成績の佳良なりーを報じ然れとも縣下患者に試用するゑ機會ゐくして患者治療試驗を行ふと能はざると遺憾とす云々と述べられたり（詳細は第二號に讓る）

第二席（尿石の檢査法）　醫學士木村孝藏君登壇、尿石の、各種類につき、發現すべき化學的反應を說明し、次で多年氏が、外科「クリニック」に於て、得たる尿石數十個を示し、親しく實物ゐつきて試驗を施されたり（詳細は次號に讓る）

第三席（木乃伊に就て）　村上庄太君登壇、病理學及び法醫學に關係ありとて、木乃伊ゑ實例を報告せらる、曰く死躰現象の主なるものゝ則ち腐敗にして、此腐敗の原因に種々ありと雖も、要するに氣、水、温乃關係にあり、此三者ゑ中、其一或は二を缺乏するか、又は其強弱多少の度に差異を生ずるときは、腐敗に遲速を生ずるのみならず、時として腐敗に陷らずして、一種の變化を爲すことあり、乃ち茲に報ずる所のものゝ、右三者の中水分の缺乏、卽ち死躰の乾燥に由て形成したる人屍の

木乃伊ゐして、其實例二あり、一は三十七年の男屍なり之に關する記錄ゑ據れば、今を距る約そ百十餘年前、某國に生れ、幼年の時心を佛門ゑ歸依し、壯年の頃、種々の難業苦業を爲し、終に飲食を斷ちて餓死を遂げたる後、此木乃伊に變化せしもれなりと云ふ、外國ゐは人屍の木乃伊ゑ關する實例なきに非ずと雖も、吾國ゐ於ては誠に稀有なる一例なりと考ふ、又一は、男女不明の兒屍にして、此歷史ゐ關することは詳ならざるも、某醫の傳へ言ふ所に據れば、某家の床下に埋沒しあること大約十五六年間にして今を距る十五六年前に某所に於て發見し、現今尙ほ某所に存在せりと云ふ、茲に持參せし寫眞は其れより撮影したるものにして、約そ卅年前に生れたる初生兒の木乃伊なり今尙ほ臍帶及び胎盤の附着せることは此寫眞に就ても明かなり、而して成書の記載に從へば、法醫學の實驗に於ては小兒の死躰、或い初生兒の臍帶、又は砒石中毒の爲めに來る木乃伊と往々見ることありと曰ふも、余は未だ其著明なるものを實驗せず、然るに此頃偶然此の如き天然の著明なる木乃伊を見ることを得たれば、病理學上及ひ法醫學上の一實例として記載するの價値あるものと信す、尙ほ終りに臨で一言すべきは、死躰の木乃伊變性を起し易きは、主ゐ熱帶地方にありと云ふを以て、恰も高度の溫熱を要するが如き感ありと雖も、今余の實例として示したるものは、熱帶地方にあらざる吾邦に於て、而も暖國に屬せざる、山間僻地より出でたるものなれば、必すしも著明の高溫と要せざるが如し、去りながら氣候及び土地に關係あるこい勿論にして、畢竟唯空氣の乾燥、水分の蒸發最も與つて力あるものなりと考ふ云々

第四席（鹿角精の成分）　製藥士櫻井小平太君登壇、嘗て裁判化學の問題に上りゑ鹿角精につき、氏が其筋乃依囑を受け、親しく之が定性定量を施せ一實驗談を熱心に述べられたり、（詳細は原著及實驗ゑ讓る）

以上一として有益ならざるはなくて興味ゐふさいなし、加ふるに滿腔の熱心と以て、說話せふるゝを以て、聽者皆興に入り、不知不識乃間時を移一、閉會を告げしは、午後六時、暮雲已に夕陽を收むるの頃なりき。

○特別會員醫學士鈴木文太郎氏　は解剖學研究のため、獨乙國留學を命せられ、七月十日當地出發、其途に上る、醫學部學生、皆氏と別るゝを悲み、六月廿六日、古寺町北間樓ゐ於て、送別の宴を開けり、其後氏は八月八日、東京と出發し、海路無事、九月十七日、伯林府に入れり。宿所左の如一

Philippstrasse　23 II
Berlin. Germany

尙氏は出立前、時々有益ある音信を本會に寄送せんことを約せられたり

●第四高等學校醫學部に於ける明治廿一年より明治二十八年に至る八年間の臨床實驗用病院患者數及屍体解剖數は左表の如し

類別	廿八年	廿七年	廿六年	廿五年	廿四年	廿三年	廿二年	廿一年
患者數	一三一七〇	一四九四七	一五四二九	一四四九五	一四一九六	一二二二六	一〇八七九	八八九六
死躰數	一三	二〇	一九	一八	二一	二三	九	一三

○得業士交名　本校卒業生にて昨年五月發布の高等學校醫學部卒業試問及卒業證書規定第十三條第二項により得業士の稱號を用ゐることを認許せられたる諸君は左の如し

醫學

加藤一郎　澤田定信
勝木直吉　米村吉太郎
北澤恒夫　蓮村外男
爪生保之　濱田芳太郎
川西初太郎　有川恒二
山田孝太郎　渡邊喜八郎
澤田房吉　佐川忠義
漆山順治　大月保三
駒形重光　河部馨雪
輪違一郎　三崎玉雪(元三崎準)
津田常吉　山本晋
梁達男(元笹木達男)　吉田周造
丸山耕平　齋藤正雄
宮内盛直(元山本盛直)　藤井秀
正見伊三郎　梁貫男
藤井順三　河合久
河村堅太郎　建入久次郎
納富嘉太郎　井口泰作
關根倉治　富田繁
河崎秀事　黑川由己
中川啓次　鈴木節齋
岡本寛造　澤賢吉
高柳元六郎　横山乾
篠尾明濟(元篠尾二七郎)　田中善敬
坂井通太郎　佐藤政太郎
竹内拙藏　赤祖父龍太郎

川手正巳　小栗熊次郎
黒田潔　清水來吉
池田和太郎　小川善平（元丸山善平）
山崎秋津麿　樫田仙次郎
元田峰五郎　廣野誠一郎
德木有隣（元木本有隣）　池田昭（元平泉昭）
坂野長三郎　田代四郎
飛見夫俊　吉川新八
吉田義一　池龜祐藏
松田準

藥學

倉重與三郎　小野治郎吉（元末岡順太郎）
堀大次郎　高橋秀
神代良太郎　小島義明
山口仙三郎　畠山潤太郎
藤本勝次郎　山本保太郎
市村鋏外（元吉田鋏外）　山田德二郎
高畠初四郎

○學生服制の變更　本校學生は制服はこれ迄小倉地にて「ジヤケツ」服なりしが爾今背廣服とし冬服には羅紗「ヘル」類とも用ゐる事を許し外套回樣「高」字入の金釦を用ゐる事ゐ改めこれと同時ゐ制帽は獨制より佛制に變更せられたり

○本校通則改正　在來乃通則中左の各項に付改正あり

入學、在學及退學規定

授業料規定

前者は來年入學者より實施ー後者は明年一月より實施せらる其中授業料納附額は左の如ー

第一期　自九月（醫學科金五圓）至十月（藥學科金四圓）
第二期　自十一月（醫學科金五圓）至十二月（藥學科金四圓）
第三期　自一月（醫學科金七圓五十錢）至三月（藥學科金六圓）
第四期　自四月（醫學科金七圓五拾錢）至六月（藥學科金六圓）

第一期　自九月十一日至同月二十日
第二期　自十一月十一日至同月二十日
第三期　自二月一日至同月十日
第四期　自五月一日至同月十日

○解剖死体精靈追善會　十月十日午後一時より野田寺町立像寺に於て解剖死体精靈追善の法會を執行せり今其概況を記さむゐ塲は同寺の方丈を以て之に充て正面にい精靈の合牌と安置し花瓶及び菓果等を供へ萬般の

用意周到ありし定刻に至りて十數名の僧侶讀經職員學生遺族の抹香等いと鄭重に遂行せふれ式全く終りしは四時頃ありし猶當日の參詣人は大島校長初め醫學部よ關係ある教職員一同學生百餘名及び被解剖者遺族十數名ありし

○特別會員上坂熊勝氏　同氏は大坂府醫學校教授に任せられ八月卅日任地へ向け出發せられたり

○金子治郎氏　元大坂府醫學校教授金子氏い我校教授に任せられ鈴木教授乃後任として解剖學を擔當せふる氏い莅任後直ちゐ本會へ加入せられたり

○日本赤十字社石川支部看護人養成　日本赤十字社石川支部には兼て看護人養成の企ある由なりしが昨月廿六日愈其開所式を擧行せり式場い舊金澤醫會堂大廣間ゐして部長代理池永書記官、幹事渡部參事官、安原第三課長、其他縣屬數名來賓としては第四高等學校醫學部主事高安右人、同教授木村孝藏、山崎幹、岡部忠、櫻井小平太の諸氏、又囑托教師にい醫學部教授小川勝陳、助教授松本善次郎の二氏、第一回生徒土村外次郎、石倉鎌太郎、小木德次、吉岡吉男、岡部松枝、上田孝太郎、舘花衝、土方治吉、の諸氏等各規定乃順列と整へ場内音治まるを待て池永書記官先つ檀に上り開場式を擧くるの辭より赤十字社の性質、看護人養成れ企圖を說き尙ほ生徒に向て希望を述べ終りて降檀、續て囑托教師小川教授登檀今回囑托を請けたる理由、看護養成の必要等を陳述し、之にて式終り一同別席に於て茶菓の饗應あり、生徒に心得方授業時間割等を示し散會せり、尙ほ聞く所に據れは授業時間は一週五時間、五ヶ月間よ終るの豫定ゐして翌廿八日より授業と始めたり、目下生徒の數は少きも本月中にい廿名に至らしむる乃見込なりと云ふ

○金澤病院手術室新築落成　第四高等學校醫學部外科臨床講義室と金澤病院二等病室との間に近頃一棟の建物峻工せり之なん新築手術室ゐして外科臨床講義室入口東北乃扉を排すれは此所に十間の長廊下あり歩を進むれば左に折れ兩側に五箇の室あり、左側最近の板戸を開けば浴室あり之に隣るものは用意室にして此所に於て衣を換ゆ又手乃清淨等に向つては湯桶、走り、れ設あり之に隣るは器械消毒室にして棚あり消毒竈の備へあり凡て器械繃帶等の消毒に充つ、之等の室に向いたる二室い手術室にして其間に廊下あり之れ學生れ傍觀に便せるもの、室は四面硝子を以て張しめ只二隅のみ滑なる白壁を存す床は敲き土間ゐして適度の傾斜と有

し排水溝あり天井は中央硝子張ゐして室内光線の不足なし二室共に横二間縦三間の廣にして二面庭園に對ふ室内ゐ備付けゐる手術臺は大さ高さ共に能く實用ゐ適ひ平面なる漆塗りの木板にて脚は塗漆せる鐵よりなり四脚共ゐ車と具ふ、其傍に塗漆せる鐵桿もて組みなせる器械据臺を備ふる等何れもアゼプチシュに意を凝し本邦獨技乃塗漆と利用せる邊等地方經濟の下に支配せらるゝ公立病院手術臺とえては材料の撰擇用意の周到宜しかと得しものと受け取られたり

○本校醫學部卒業式　十一月九日午後二時より本校講堂に於て擧行されたり先づ大嶋校長は恭〻く勅語と捧讀し夫より醫學科卒業生鈴木寛之助氏外十九名、藥學科卒業生圓山萬三郎氏外十名へ卒業證書を授與し且つ卒業生ゐ將來の希望を述べたり次に同校醫學部主事高安右人氏亦卒業生ゐ注意と求め又例に依て昨年の授與式以來一年間の報告とゐし次に鈴木寛之助氏は醫學科卒業生總代として圓山萬三郎氏は藥學科卒業生總代として各答辭を述べ之にて式終り別室にて來賓一同へ酒肴の饗應ありたり來賓は三好旅團長、酒井聯隊長、上田裁判所長、河西檢事正、池永書記官、渡邊參事官、高北典獄其他前田直行氏、松田吉本の兩代議士等凡そ五十餘名ゐりき當日高安主事報告中の一二節を記すれい

△卒業生は當醫學部創設以來今回の分を合せて醫學科百八十四人藥學科四十八人合計二百三十二人なり内官廳に奉職五人病院從事三十一人開業九十一人會社等四人兵役九人醫科大學等ゐありて研究中の者五人死亡九人未詳一人其他は今回の卒業生とす

△明治二十八年以後に係る卒業生い卒業證書を受領すると共に醫學得業士若くは藥學得業士れ稱號を得る者ゐり而して明治廿七年以前ゐ係る卒業生い學力の檢定を經て得業士の稱號を得る者ゐして客年十二月該檢定を開始してより既に得業士の稱號を用ゆることを認許えたる者醫學七十二人藥學十三人ゐ及べり

○醫學部卒業生変名　今回我醫學部を卒業せられ得業士の稱號を得られたる諸君は左の如し

醫學科

鈴木寛之助（長野）　嶋田吉三郎（富山）
紺谷　良作（石川）　室田萬三太郎（福井）
千田榮三男（石川）　竹中繁次郎（富山）
堀　直江（長野）　東　良平（富山）
樹　薫（福井）　永井　環（岐阜）
東　龜太郎（石川）　中嶋正泰（元宮永小次郎）（富山）

他岩倉、久保、武田、吉田等諸氏の勇壯なる劍舞は人をして奮起せしむ、皆々充分の歡を尽し卒業生萬歳を唱へ歩行蹣跚歸路に就きーは正後十時おりき、當日會するもの百三十名近來の盛會なりき來賓として主おるものは卒業生學校職員其他市内の醫師及藥劑師諸氏とす

○本校秋期陸上大運動會　豫てより本校醫學部第四年生藥學科第三年生、大學豫科第三年生、發起となり去る天長節の佳晨と卜し本校庭内に於て陸上大運動會を擧行せんと欲し發企者い東奔西馳準備れさ〳〵怠りおく漸く其擧と滿足なふをめたり先つ當日の概況を記さんお當日は幸に一天拭ふか如く金風淅瀝として旭旗は中天に飜へり、登校する幾百の健兒は勇氣日來に百倍せざるおし、會は天長節式後第八時と以て開かれたり、重なる來賓は文武各高等官、學校職員、市内紳士紳商及同家族等ゑして其他公衆の看觀人は縷々蟻集し左しもに廣き場内も立錐の餘地だになし、先場内の光景は入場口お當りてエーマン氏の寄附ゑ係ゑ大緣門聳然として控へ之を通過し終れは稍左手に於て日本武尊像を擬したる巨大の作物あり其容貌姿勢の凛然たる服裝武器の眞に迫る實に巧と稱するの他なー之れ卽一部一年甲組れ寄附たり稍右手藥學校教室の裏ゑ當り醫三年の餘興

本多　勝久（石川）　林　幸一郎（石川）
金子多須計（新潟）　末岡外次郎（石川）
園崎純次郎（石川）　田上　渉（石川）
廣野喜久雄（東京）　森川　脩（石川）

藥學科

圓山萬三郎（鳥取）　平井　正澄（鳥取）
松ヶ枝眞九郎（熊本）　山下　博吉（兵庫）
小西虎次郎（岡山）　渡邊　鐵（岡山）
林　常雄（石川）　安田順太郎（石川）
鷲田發次郎（石川）　嶋崎　端吾（大分）
濱田　北辰（香川）

○第九回醫科卒業生祝宴會　同祝宴會は例の如く本月八日野田寺町鍔甚樓に於て開かる會場の入口に一大緣門を建て醫祝と菊花を以て作れる額を掲げ上に國旗を交叉し數百の球燈を以て場の周圍を繞らす會は午後三時お開かれ先つ發起人總代として藤岡勝治氏れ演說了り次て卒業生總代鈴木寛之助氏の挨拶了り之より學生安村順吉、田所進、白井精一、甲谷三吉、助教授佐野安麿等諸氏の演說及び學生相馬羊吉、榊原久等諸氏の祝辭朗讀等あり終て酒宴を開く酒酣にえて金森、永井二氏の茶番會者の願を解き富田氏の手品其巧妙を尽くす其

ゐ係る八陣及奏樂あり劉亮鏘々君ケ代の人心をして肅然たらしむるか如き八陣及花闘の趣向乃巧ゐるか如き學生の事業としては豫想外ゐるべー其他法三屋れ辨當舗とゐりて客と引き三部屋の茄菲店開業の如き皆八字先生束髪令孃學生の質仆なる待遇に財囊の底を叩ケ毫々の聲己むときなー會場表面ゐは來賓席、委員席、會員席何れも幔幕と張りて坐を定め本會の寄附ゐ係る十全病院はテントと張り國旗と十字章旗を交又ー數十名の委員は藥品、器械乃整頓ゐ餘念ゐく眞に一箇の野戰病院を作られたり、其他藥學リモナーデ店、時習亭の茶店等何れも待遇の溫優なるゐ滿足せざるはゐし、第一回ゐ六十回迄乃競走は次第々々ゐ歩を進め其間委員の東西ゐ奔走せるは至れり盡せりと云ふべし、日來股を叩て事なきを歎せゑもれ今日や實に其技を試むるの秋ゐり甲馳り乙駈け我こそ一等ならんと豫企して中途にあたゐ顚倒し見物の笑と買ふもの已れ先登第一と心得乍ら後進の者に追ひ越され煩悶せゐるもの決勝點ゐ近き審判に無功の宜告を受け失望するもの一々名狀すべがゐず、内にも時習寮の劍舞、醫二の野戰的競走、法二の豚尾追擊の如き何れも新規の餘興として一段の目ばへを添へたり競技中障害物競走、一哩競走、各撰手競走等は眞に得獨の妙技を看せゑむるに足るか、終りに各級撰手競走となれり何れも屈强の强走家、一級の名譽は悉く彼等の隻肩に集まれり、こゝ一發の合圖と共に赤、紫、黄、白は走り始めたり、各級生は手に汗握り我れを知らず飛出し進め！勝て！遲るゝな！、顚ぶな！の掛聲は廣き場内尙湧くが如し遂に先着の榮は赤に歸ゑたり、めたるは法三撰手佐藤龜久治氏の手に落つ、醫二年武田氏い些少の差にて二等を得ざりしい遺憾、……玆ゐ競技い終り各會員は圓陣を作り校長の音頭ゐ伴ひ陛下れ萬歳を三唱し、酒肴と味ふて散會セーは午後六時頃なりき

因に當日本會より金拾七圓及衛生部を寄附したり

○短艇競漕會乃景況　同會は豫期の如く十月十七日河北瀉大根布村附近に於て催ふせり今其景況を聞くに湖畔の沙地に簀小屋を建て競技者席番組委員席賞品授與所職員席等と設け場の前面には國旗を交又ゑ番組を貼附ゑあり猶湖岸を距ると三十米突ゐゑて浮漂あり三梳の國旗を樹てゝ決勝點を示ゑ夫れより東北四百米突にして回航點と示し更に東北四百米突にして直航出發點あり審判官は終始艇に乘じて一回毎に銃を放ち勝敗を判定せり中に一回の職員競漕あり大島校長は赤艇に佐

野助教授は白艇ゐ何れも長とゐり一同勇を鼓して進み拍手喝采の裡遂に赤艇れ勝ゐ歸しぬ合計十四回拂曉より薄暮に及ぶ當日は天氣晴朗にしてがゝる催えには恰適日和なりき

○甲午藥學會　該會は明治二十七年一月舊藥學同窓會の規則を改正し更に名稱を改めて甲午藥學會と稱し其組織と擴張し藥學有志者とも編入一例會を毎月一回開設して毎回演說等の記事を集綴し年一回以上會報を發刊し地方會員に配付せり而して今回其第三號を發刊一附錄と一てオット氏裁判化學譯書第一卷を添へたり

○私立高等學校豫備學舍　該舍の創立は明治二十七年二月にして本市西町三番丁石川藥舘内に設置し爾後高等學校令に基ゐ規則を改正ゑ職員を增聘一て大に規摸を擴張し且つ修業年限は三年れ速成にて尋常中學校卒業乃程度を得せゑむ目的あれば醫學部入學志願者の爲めには最も便益なる校舍と云ふべし又這回醫學部入學試驗を受け及第一たるもの十四名にして現在生徒の數は五十餘名れ多きに達せりと云ふ因に該舍長は醫學士山田謙治氏にして職員の一部は醫學部教官も出勤せりと

○福井縣醫學得業士會　數年來福井縣高等中學醫學部卒業生會なる名義を以て設立され居りしか昨年來表題の如く改稱一專ら卒業生の品位として高尙に進ゑめんとを圖り毎月一回通常會と開き學術經驗上の談を交へ毎年一回夏季に大會と開き以て歸省中の學生及高等學校に緣故ある者等と招き其懇親を結ぶと例とせり本年ハ七月二十五日と以て大會と福井市五嶽樓上に於て開けり參會者殆五十名先規則修正と行ひ尋て會員中實地治療上困難を感せし患者數名を率ひ來れるものあり會場に於て各會員の診定を求め討論的ゐ病理治療等と探究し出題者に利益ある參考を與へ終りに酒宴と張り會員各自の親睦を溫め十二分れ歡と盡して閉會せり因に當日の參考たりし患者に就ては追て精一く記載する所あるべ一

○陸軍々醫階級改正の上奏　從來少將相當官なりゑ軍醫總監を中將相當官に進め大佐相當官なりし軍醫ゑ少將相當官に進め以下一二等軍醫正と一等宛進級し是迄少佐相當の二等軍醫正の代りに三等軍醫正を新設することとなり既に上奏に及びたりと聞く、右の通り官制改革せらるゝ上は當時少將相當官たる石黑軍醫總監は中將相當官に昇進すへしと云